—1962・March—

LEBEN

第4号

鹿児島大学生物研究会

目　　次

喜界島の蝶類（1961年）……田中　洋……1

沖縄での一ケ月……坂口総之輔……14

屋久島の蝶類採集記……橋元紘爾
肥後昌幸……19

屋久島の採集紀行……成見和総……24

編集後記……50

喜界島8月の蝶類（1961年）

田中　洋

１９６１年の夏休みを利用して医学部第二病理（寄生虫）教室から喜界島に寄生虫の調査に行つた。そのとき蝶の採集・観察をすこしすることができたので報告する。

喜界島の蝶に関する文献によるとある程度，蝶相の貧弱さは想像できたし，時期も最悪の８月上旬であつたうえに，蝶採集が目的でないので調査はあまりできないだろう，とは考えていた。まさに予想通りだつたし，健康に自信がないために，遠くへ採集に出歩くことがまつたくできなかつた。蝶の種・数ともすくないのには最近なれているはずだつたが，１０日間同じところに住んでいて１１種しかみないというのには，いくら採集に出歩くことができなかつたからとはいつても，すくなすぎるようで考えさせられた。農学部の初島住彦先生におうかがいしたところ，とくに喜界島に植物の種類がすくないということはない，ということだが，蝶のほうはどうなのであろうか。今回喜界島で合計１４種の蝶を確認し，そのうちギンモンウスキチヨウ（目撃），ウスイロコノマチヨウ（目撃），オジロシジミ（卵→飼育→羽化）の３種は喜界島新記録種である。これで喜界島の蝶は合計２１種が記録されたことになる。

喜界島の蝶に関する報文もすくないし，くわしい報告はまつたくない。ただ単なる分布地の記録としてでなく，今後の鹿児島県の蝶研究のひとつの出発点として役に立てることも考えて１０日間で得た資料を報告する。

同行の医学部第二病理・影井昇氏や学友３人，そのほかの方々にはいろいろと御世話になり感謝している。

Fig.1 喜界島

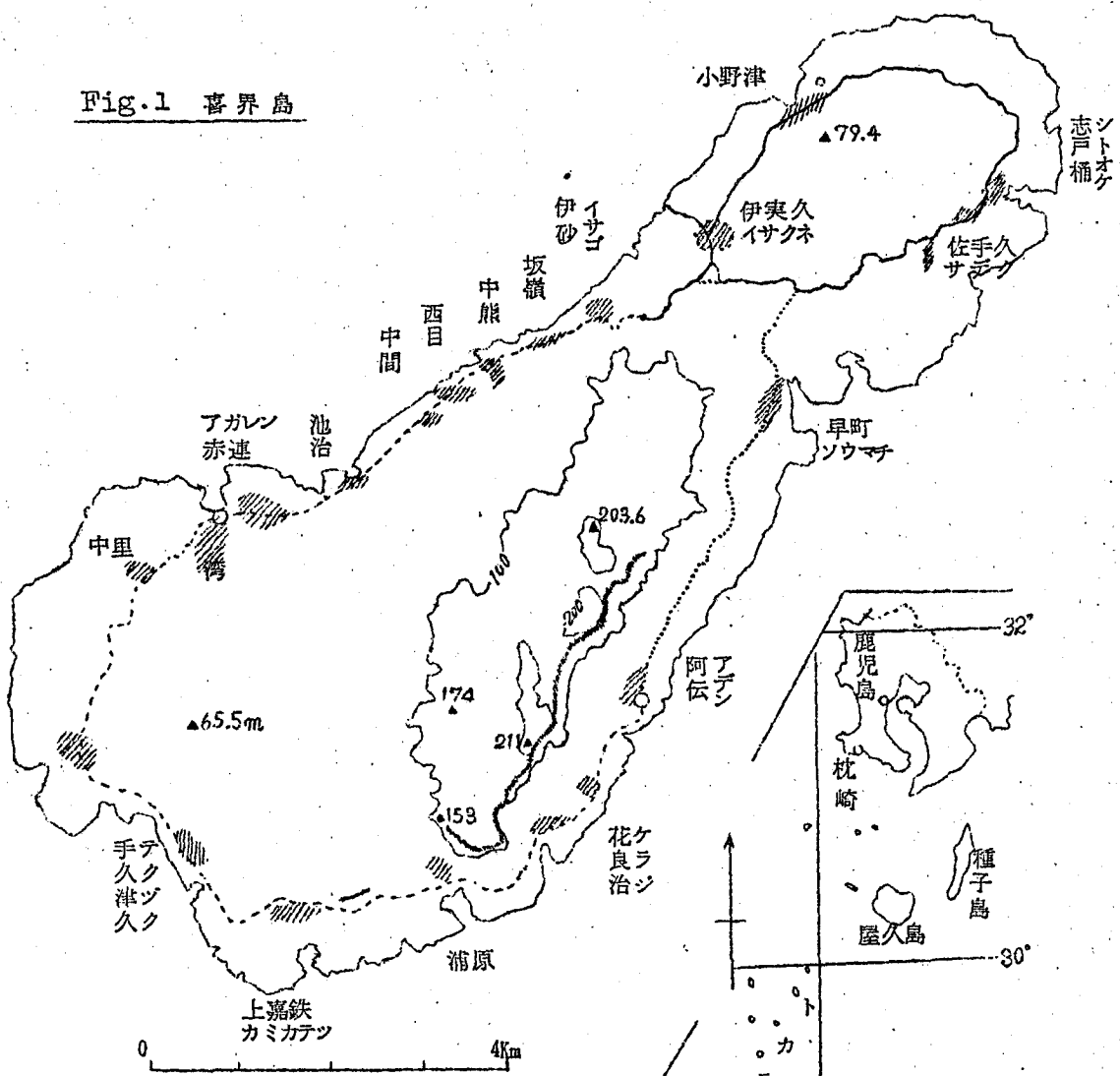


Fig.2 喜界島の位置

I、喜界町伊実久の蝶 （Fig.1）

この部落内は大きな樹木があり，林となつている。ギヨボク・ガジユマル・ハマイヌビワ・モクタチバナ・ミカン類・パパイヤ・バナナといつた木のほかは，ドイツ語を知らずにドイツ文を書こうとするようなもので，書きようがない。草花は思つたよりすくなく，プツソウゲ，ダンドク（カンナ），サルビアなどの赤い花，ゲツキツの白い花，などあつたがあまり多くない。水田のあぜ道にイワダレソウがあるが南薩で探してもみつからないだけにちよつと奇異に感じられた。

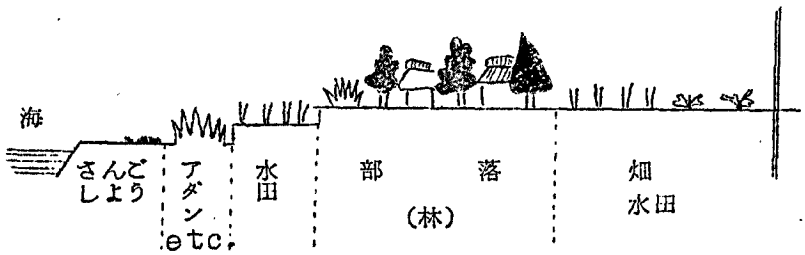


Fig. 3　　伊実久付近の模式図

部落内の木陰でアマミウラナミシジミやシロオビアゲハがみられ，ツマベニチヨウ♂がときどきギヨボクにやつてくる。部落のそとのダンドクの赤い花でツマベニチヨウやシロオビアゲハが吸蜜している光景が頭に残つている。水田の近くにタテハモドキがいるぐらいで，これらの蝶の動きをゆつくりながめることも時間的に不可能だつたのは残念だ。

１０日間の蝶の記録はつぎのとうり（Tab.1）

〔Tab.1〕　喜界町伊実久の蝶

日/月（時間）	4/VIII (18:00～)	5/VIII	6/VIII	7/VIII	8/VIII	9/VIII	10/VIII	11/VIII	12/VIII	13/VIII (～10:10)
天候	○	○	○	○	○	○	○◎	○	○	○
1.チヤバネセセリ		L (1ex)								
2.アオスジアゲハ		1ex	+				[1♂ (0)]			
3.アゲハ								1♂ (0)		
4.シロオビアゲハ	1ex [1♀]	+ [2♀]	+ [1♂]	++	++ (0-2)	++ (0-3) [2♂]	++ (0-2) [1♂]	++ (0-3) [1♂♀]	++ [1♂♀]	+ [1♂♀]

5ナガサキアゲハ		♂ (3回)	+ [1♂]	[1♀] (1)	+	[1♂] (0)	+	+ [1♀]	+ (1)	
6モンキアゲハ							2eXS (0)			
7ツマベニチョウ	[1♂] (3)	++ (1~3)	+	+ (0-2)	+ [1♀] (3)	1♂		1♂	1eX	
8アマミウラナミシジミ		[2♂] (0,2)	+ (0-2) 3♂2♀		++ (0-1) [2♂]	++ (0-2) [2♂]	++ (0-1) [2♂]	+ [3♂]		
9ヤマトシジミ		+	+ [1♂]	+ [1♂]	+ (0-3)	+	+			
10タテハモドキ			++ [1♀] 白帯	+	+ (2)					
11ウスイロコノマチョウ	2eXS	1eX;						1♂ (1)		

〔記号の説明〕

○個体数　++（多い），+（普通），+（少い）

○新鮮度　0（新鮮完全），1（少破），2（中破），3（大破）

○すべて目撃観察の記録を書いてあるが，採集したものは〔　〕の中に記した。〔　〕だけのものはほかに見なかつたことを示す。

II、喜界島の蝶・分布資料

喜界町伊実久以外の土地はほとんど歩いていないのでくわしいことは調査できなかつたが，わずかの時間で確認できたものを記録しておきたい。

(1)　喜界町・伊実久ー佐手久ー志戸桶ー小野津ー伊実久

歩いたコースは部落にすこし木立があるほかはほとんどサトウキビ畑や田畑として利用され，蝶の生活にとつてもあまり住みやすいところとは思われない。カタバミはずつとあるが，島のまん中の白いかたい路傍に葉の小さいイワダレソウがあつたのは“所かわれば品かわる”か。めずらしいことではなさそうである。

〔Tab. 2〕　喜界町北部の蝶

コース	I	II	III	IV	V	VI
	伊実久～佐手久	佐手久	志戸桶	志戸桶～小野津	小野津	小野津～伊実久
時間	9:20 →		10:15～13:00 →		14:00～15:40 →	16:30
1.シロオビアゲハ		+	++	1♂♀	++	
2.ミンミンウスキチョウ			1♀			

3.ヤマトシジミ	+ 〔2♂〕	+	+ 〔1♂〕	++ 〔7♂〕	+	〔1♂〕
4.シルビアシジミ	〔1♀〕					
5.ツマグロヒヨウモン						〔1♂〕
6.タテハモドキ	+ 〔1♂茶帯 1♀白帯〕	++	++	++ 〔1♀白帯〕	+	

(2) 喜界町湾：1961年8月13日（0　10：40－13：00）

ここは喜界島最大の部落で明るい街である。この街の中を炎天下にシロオビアゲハとタテハモドキとヤマトシジミが飛んでいた。

〔Tab. 3〕

1. シロオビアゲハ	++〔1♂(0)〕
2. ヤマトシジミ	++（0－1）〔2♂♂3♀♀〕
3. ツマグロヒヨウモン	1♀
4. タテハモドキ	++（0－3）〔1♂(0)茶帯〕

※　1961年8月4日（0　15：10～16：30）には蝶は1匹もみなかつた。

(3) 喜界町阿伝：1961年8月13日（0　14：00～）

海に面した小さい部落で，学校の校庭にしきつめたイワダレソウのじゅうたんが印象に残つている。夕方仕事がすんでからわずか10分ぐらいさんごしょうの海岸に出てみたときシルビアシジミをみつけたが食草は確認できなかつた。

〔Tab. 4 〕

1. シロオビアゲハ	1 ex
2. ヤマトシジミ	++（0～2）〔5♂♂〕
3. シルビアシジミ	〔3♂♂(0)〕
4. オジロシジミ	E(++)，L
5. タテハモドキ	1 ex
6. ウスイロコノマチヨウ	1♂

Ⅲ、シロオビアゲハの島内分布

従来の記録は喜界島内における詳細な分布地を記したものはなかつたし，島内における蝶の分布をもつとくわしく調べる必要があると考え，今回はとくにシロオビアゲハを注意して記録をとつた。

Ⅰ，Ⅱの伊実久・佐手久・志戸桶・志戸桶—小野津・小野津・湾・阿伝，と文献（6）の西目

（喜界高校）のほかに；

１９６１年8月13日（０　バス内より目撃）

○伊砂～坂嶺（１♂），坂嶺～西目（１♀）西目～中間（＋）　<以上１０：１０～１０：４０>

○中里（＋），荒木（＋），手久津久（１ex），上嘉鉄（１ex），花良治（１ex）

<以上１３：００～１３：５０>　１９６１年8月14日（０　バス内より目撃）

○浦原（１♂）　７：００，上嘉鉄（２exs）７：１５

※西南部では福田晴夫氏・今村啓子さんの調査があり，別に報告される。

※広く島全体に分布するらしいということがわかつたが部落近くで多くみられる。

Ⅳ．喜界島産蝶の飼育記録

１）チャバネセセリ：$^{5}/_{VIII}$ 伊実久，ススキより中令（１ex）を採→ビニール袋で飼育→ $^{17}/_{VIII}$ P→ $^{23}/_{VIII}$ A（失敗）　※採集したときは葉を筒状にした巣の先も食べているが，巣より根本のほうもたべていた。

２）ツマベニチョウ（伊実久，ギヨボク）

① $^{4}/_{VIII}$ 葉表に卵（１ex）→ $^{6}/_{VIII}$ H→ $^{17}/_{VIII}$ 終令となる。のち行方不明。

② $^{6}/_{VIII}$ 葉表根本の中脈に葉の先に頭をむけて静止している中令（１ex）を採→ $^{17}/_{VIII}$ P→ → $^{20}/_{VIII}$ 頃かつ色化して死

③ $^{11}/_{VIII}$ 葉表に②と同様にして静止している中令（１ex）を採→ $^{17}/_{VIII}$ 終令となる→ $^{24}/_{VIII}$ P→ $^{2}/_{IX}$ A（１♀）

３）シロオビアゲハ

① $^{7}/_{VIII}$ 伊実久，第１型♀を採→ミカンの新芽にアミをかけて放す→ $^{8}/_{VIII}$ 夕までに計６０個うむ→ $^{11}/_{VIII}$ 頃H→ $^{24\sim29}/_{VIII}$ P（２０exs）→ $^{4}/_{IX}$ A（３♂♂２♀♀），$^{5}/_{IX}$ A（１♂），$^{7}/_{IX}$ A（１♀），$^{8}/_{IX}$ A（３♂♂１♀），$^{9}/_{IX}$ A（１♀）

※F_1 は♂：♀＝８：６（♀はすべて第１型）

② $^{11}/_{VIII}$ 伊実久，第２型♀を採→ミカンにアミをかけて放す→ $^{12}/_{VIII}$ 夕までに１２exs うむ→ $^{14}/_{VIII}$ H→ $^{27\sim30}/_{VIII}$ P（８exs）→ $^{7}/_{IX}$ A（１♂不完全），$^{8}/_{IX}$ A（１♀），$^{10}/_{IX}$ A（不完全蛹より１♂），$^{11}/_{IX}$ A（１♀），$^{10}/_{IX}$ A（１♀）

※F_1 は♂：♀＝２：３（♀はすべて第２型）

③ $^{6}/_{VIII}$ 伊実久，栽培ミカンの若葉に幼虫（＋），蛹のカラ（＋）

④ $^{7}/_{VIII}$ 伊実久，ミカンの新芽に卵（１ex）→ $^{10}/_{VIII}$ H

⑤ $^{13}/_{VIII}$ 湾，地上３０cmのミカンの幼木・葉表に１令（２exs）

⑥ $^{11}/_{VIII}$ 伊実久，１１：１５頃　１♀栽培ミカンの新芽に産卵（＋）

⑦ $^{12}/_{VIII}$ 伊実久，１０：５０頃　１♀栽培ミカンの新芽に産卵（＋），１１：１０　第２型♀栽培ミカンの新芽をさがしてハネをふるわせながら１個ずつうむ。

４）アマミウラナミシジミ：$^{8}/_{VIII}$ 伊実久，モクタチバナの若葉表に中令（１ex）がいてア

リ（未同定）が milkingしていた → 飼育失敗

※ 9/VIII 葉裏から卵のカラがみつかつたが，幼虫はみつからない。

5）オジロシジミ： 13/VIII 阿伝，ハマササゲ（マメ科，初島住彦先生同定）のつぼみ・花に卵多数（幼虫もいたらしい）。→つみとつてビニール袋に入れる→ 16/VIII P（1ex）→ 24/VIII A（1♂）： 16/VIII 中令（1exのとる）→餌不足で食草の茎までたべて，ヤハズソウの葉を入れておいたがたべずに 23/VIII P（小型）→ 28/VIII A（1♂）

《記　号》 H：ふ化，　P：蛹化，　A：羽化

V、おもな蝶についての補足

1. シロオビアゲハ

この時期には個体数は多いというほどではなく，飛びかたはゆるやかだが敏感な蝶である。だいたい地上1.5m位の高さをとび花にくる。ふたつの個体が接近する場面はあまりみられなかつたが，ダンドクの花のまわりをゆるやかにとぶ2♀はほとんど互に無関心のようだつた（17時，5/VIII）。サルビアの花にきた2♂は出会うとややするどく追飛をしてとび去つた（11時5分，12/VIII）。

(1) 吸蜜の記録（地名の書いてないのはすべて伊実久）

○ダンドク（カンナ）・赤（5/VIII　17：00　2♀）（6/VIII　11：30　1ex）（13/VIII　10：55　湾　1ex）

○ブツソウゲ・赤（6/VIII　午前　1ex）（13/VIII　12：18　湾　1♂）

○樹種不明（地上3－4m）・カラカサ型白花（7/VIII　14：00　1ex）（11/VIII　午后　1ex）

○アオイ・赤（7/VIII　15：00　1ex）

○バラ・桃（10/VIII　12：30　1ex）

○サルビア・赤（9/VIII　11：30　1♂，15：15　1ex，16：15　1ex）（10/VIII　14：55　1ex）（11/VIII　13：10　1ex）（12/VIII　10：10　1ex，11：05　2♂，13：45　1ex，15：45　1♂）

○不明（14/VIII　7：15　上嘉鉄　1♀）

○ランタナ・桃（13/VIII　11：30　湾　1ex）

※サルビアの記録が多いのは庭にうえてあつたためであるが，記録もれのものもある。

※吸蜜植物はほかに数種野生の花も含めてみているが種名不明のため記せない。吸蜜はハネをふるわせながら行い，サルビアでは2－3秒吸つては花をうつつり数回くりかえしてとび去つた。ブツソウゲではかなり熱中（？）してひとつの花で長く吸蜜していた。サルビアはあまりおいしくないのだろうか？　吸蜜時間はだいたい10時から16時までみている（部落内）ががが，ひらけたところでは7時，17時にもみているので明かるさに関係があるのかもしれない。

(2) 吸　水

13/Ⅷ　湾で11：50　1♂が路上の打水で吸水しているのをみただけである。とまつたはじめはハネをゆつくりふるわせているが，のちふるえをとめてハネを半開にしてじつと吸水していた。

(3) 産　卵

2回産卵をみただけだが，♀が栽培ミカンのまわりをとんでいるし，幼虫も若干みられたのでやはり栽培品種と強い関係があるものと思われる。野生のサルカケミカンはみつけられなかつたが，ゲツキツという植物があつたので食草となりうるのかもしれない。栽培種と野生種と蝶との関係をしらべると面白そうだ。ちようど8月10日頃は新芽がのびはじめたころで産卵がみられるようになつた。「ミカンの新芽と産卵がうまく合つていて発生もわりとはつきりしている」とも思えたが，その間ほかの食草に産卵が行われているのかもしれない。

(4) 日周活動と棲息地

［Tab.5］ シロオビアゲハの日周活動（喜界町伊実久）

産　卵				×	×							
吸　蜜	●			● ●	●●△	●●	● ●	● ●	●●●	●	●●	
活動個体数									○○○○○○○○			
×・湾	△△		○ ○	○ × ○○○○○○	○ × ○○○○○○	○○	○○		○○○○○○		○○○	
△（南部）	△		○○○	○○○	○○○	×○○○○○	○ ○○○○	○ ○○○○	○○○	○ ○	○	○
そのほか												
時	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18

（注）13：00－15：00は「ひるね」をした日もあるので観察不十分

10日間の記録をまとめたのが Tab.5 である。とくに活動のさかんな時間というのはみられない。9時から17時までふつうにみられ，日中に林内に多いということもない。棲息地は部落付近が主であるが，ほかの草原などでもみられる。部落周辺のあかるいところでは7時から，おそいのは部落内でねぐらをさがすような1exが18時にみられ，18時30分にはすでにハネを水平に開いて頭を上にし，前翅を後にさげて静止している1♀を観察できた。羽化の時間は，8月13日8時，伊実久で1♂が羽化してすでに翅がのびているのを観察している。

2、ツマベニチヨウ　（伊実久）

部落内にギヨボクはかなりあつたが蝶はすくない。発生期の末期かとも思つたが卵・幼虫など

きわめてすくなかつた。ギヨボクは幼木にかなり若い葉もあつたが，大木は古い葉ばかりであつたのでこれに関係があるのかもしれない。吸蜜植物はダンドク（ $^{6}/_{VIII}$ １♂）（ $^{7}/_{VIII}$ ２♂（０♂３））をみただけだつた。後の２♂はときどき出会つても追飛はきわめて弱くまた吸蜜をつづけた。花の量は多かつた。

部落内のギヨボクに夕方になると♂がやつてきてギヨボクのまわりをうろついてからその近く（地上３～４ m）に休んだり（ $^{4}/_{VIII}$ １８．３０ １♂(3)），ギヨボクのまわりをゆつくりとびまわつてゆつくり去る（ $^{9}/_{VIII}$ １２．３０ １♂）（ $^{11}/_{VIII}$ １６．４５ １♂）ものや，大破した♀がギヨボクのまわりをゆつくりとんでいたが産卵せず近くの大木地上３～４ m に静止した（ $^{8}/_{VIII}$ ）のなどを観察した。

♂がギヨボクのまわりをうろつくという現象はすでに報告されているが， $^{4}/_{VIII}$ の１♂を採集してみたら後翅裏面に橙色の花粉をいつぱいつけていた。吸蜜後の休けいか？吸蜜後に♀を求めてギヨボクに舞いもどつたのか？

3、アマミウラナミシジミ （伊実久）

モクタチバナは部落内にたくさんあり新芽があつたが卵・幼虫などすくなかつた。成虫は新鮮～小破程度で個体数は多くなかつた。（この蝶に限らず発育のステージがそろつているかのようにみえたが，いまはまだなんとも言えない。）

部落の樹林内でのみ見られ，活発にとびたつてもあまり長くとばずもとの位置近くに帰る。樹林内で日当りのよいゲツトウ（？）の葉の付近で観察したものは $^{9}/_{VIII}$ １２.００（２頭），１６：２０（２♂♂）ともに日光のつよいとき活発にくるくるととびあがつてすぐ帰る。帰つて止つてから歩いて向きと位置をかえて，葉の先端へ向つて，頭をやや下にむけてそのまま静止する。とびまわる時間よりもじつとしている時間が長かつた。

4、タテハモドキ

海岸・水田・畑と海岸に近いあかるい部落の路上でみられた。食草イワダレソウは学校の校庭や水田のあぜ道・島のまん中の路傍にかなりたくさんあつた。水田のかりあとにも成虫がいたが，スズメノトウガラシがあつたかは不明で，問題となる“イワダレソウ以外の食草”はみつけることができなかつた。

ここでは一年中イワダレソウだけにたよつて生活しているのだろうか？ 人間の生活とどれくらい関係があるのか？ 分布の限界地域である南薩・南隅と年中普通にとれるこの地方とのタテハモドキでは，生活のちがいがあると思われる。

5、シルビアシジミ

こんどの渡島でもつとも楽しみにしていた蝶で，喜界島のシルビアシジミは何を食べているのか，ということを知りたかつた。さいごの１０分のチヤンスに阿伝のさんごしようを歩いて３♂♂を発見・採集した。下をさがしてみるとマメ科植物があり，つぼみに卵がたくさんついている。つぼみに卵がついているということを変に思いながら深く疑いもせずもち帰つて，羽化したのをみるとオジロシジミだつた。完全な失敗に終つた。

奄美群島には九州本島での食草ミヤコグサはなく，ほかの植物をたべていることはまちがいない。奄美大島などでは産卵植物が調べられているが不完全で，徹底的に調べる必要がある。

6、オジロシジミ

喜界島新記録種で，食草も未記録のハマササゲ（マメ科）〔農学部・初島住彦教授同定〕であることがわかつた。土着性を論ずるにはまず食草（とくに秋〜冬の）や成虫の餌などを調べてみるべきだろう。

7、ウスイロコノマチョウ

採集できなかつたが夏型を目撃した。これが喜界島初記録で土着の可能性はあるが，その根拠はまつたくない。幼虫が何を食べるか　　全島にたくさんあるサトウキビやイネをたべるのか？　部落内のススキはつねに注意してさがしたが食痕も幼虫もみつからなかつた。

8、ギンモンウスキチョウ

８月５日，喜界島北部の志戸桶小学校校庭で休んでいるとき１０mぐらい先をとぶ鮮黄色の個体（１♀）を目撃したが，追跡することはできなかつた。喜界島新記録種であるが，迷蝶だろう。

9、とれなかつた蝶など

○アオノクマタケランかゲツトウはあつたがクロセセリは幼虫・食痕・成虫，なにもみつからなかつた。

○サルトリイバラの類があり若令幼虫の古い食痕と思われるものはみられたが，ルリタテハの成虫や幼虫はみつからなかつた。

○イヌビワもありハマイヌビワの大木もあつた。ハマイヌビワ（初島住彦先生同定）にはイシガケチョウの中令以後の食痕と思われるもの（Fig. 4）があつたが，幼虫・成虫などまつたくみられなかつた。（未記録種）

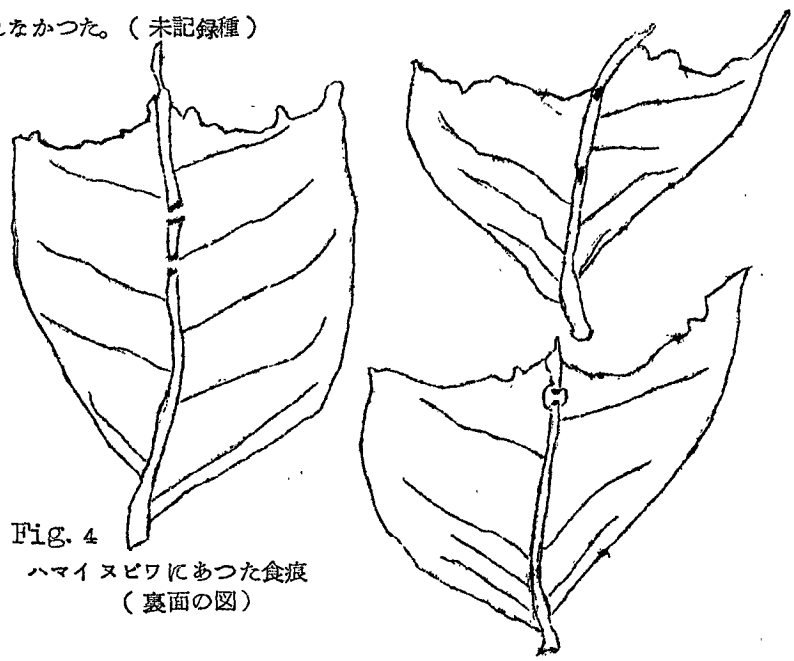


Fig. 4
ハマイヌビワにあつた食痕
（裏面の図）

○そのほか，奄美大島でこの時期にみられる“普通種”をすこしは追加できると思つたが，モンシロチョウ・キチョウさえみられなかつた。
○アオタテハモドキやカバマダラをはじめ，“迷蝶”にも気をつけたがみつからなかつた。

VI、喜界島の蝶に関する文献の目録

※“original”だけをあげる

1）酒井久馬（１９３５）：種子島及び喜界ケ島の蝶（鹿児島高等農林学校博物同志会々報，4（１５）：１３２～１３５）［喜界ケ島の蝶９種：アゲハ，クロアゲハ，シロオビアゲハ，ナガサキアゲハ，アオスジアゲハ，ルリタテハ，タテハモドキ，ツマグロヒョウモン，ツマベニチョウ［１９３５］６月１８日～２８日　採集地は“喜界・早町両村”とあるだけで詳細不明。］
2）川崎倫一（１９５５）：奄美群島採集放談（新昆虫　8(5)：１３～１５）［喜界島のシロオビアゲハの記を含む。］
3）白水隆（１９５８）：日本産蝶類分布表（２８３　東京・北隆館）［p.9　：１９５５年5月，伊藤修四郎博士（浪速大農学部）による採品；モンキアゲハ（１♂，V．１６）ヤマトシジミ（♯，V．１５，１６）シルビアシジミ（♯，V．１５，１６）アカタテハ（１♀，V．１８）アオタテハモドキ（１♂１♀，V．１５：１♀，V．１８）採集地は喜界町とあるだけで詳細不明。］
4）白水隆（１９５９）：岡部浩洋博士採集の喜界ケ島の蝶（Pulex，（２１）：８４）［１９５４年［７月］１５～２１日　チャバネセセリ（１♀），アオスジアゲハ（１♀），シロオビアゲハ（１♂２♀），ナガサキアゲハ（２♂１♀），ヤマトシジミ（１♂），ツマグロヒョウモン（２♂１♀），タテハモドキ（２♂１♀）採集地は喜界町及び早町［村］とあるだけで詳細不明。］
5）福田晴夫（１９５９）：大隅半島及び喜界島に於けるメスアカムラサキの採集記録（SATSUMA　8(3)：７）［１９５９年8月８日　喜界町湾の天神山という岡の頂で１♂（中破）を採集。］
6）田中洋・田中章（１９５９）：喜界島と与論島の蝶の採集記録（SATSUMA　8(3)：１６～１７）［１９５９年７～８月　新田栄六氏採集，チャバネセセリ，イチモンジセセリ，シロオビアゲハ，ナガサキアゲハ，ツマベニチョウ，ヤマトシジミ，タテハモドキ，喜界町［西目付近］］
7）福田晴夫（１９６１）：鹿児島県の迷蝶について（理科研究発表要項＜１９６１年8月於長崎大会＞　１５～１７）［付表の迷蝶の分布表中に喜界島のアマミウラナミシジミは喜界島最初の記録。くわしいデータは記してないが近く発表される。］

［附　記］奄美大島の蝶の記録

喜界島へ行くときと帰るときに得たものを参考のために記しておく。

(1) 名瀬市唐浜

1961年 日/月 [天気] (時間)	4/VIII [◎] (9:30〜10:20)	14/VIII [○のち◎夕立] (14:30〜)	15/VIII [○のち夕立] 〜10:00 (13:00〜15:30)
o 1.チヤバネセセリ		[1♀]	[1♂]
o 2.ジヤコウアゲハ		+	
3.アゲハ			+
4.モンキアゲハ			+
5.ナガサキアゲハ			1♂
o 6.キチヨウ	+	[1♀]	+(0)[1♂]
o 7.ムラサキシジミ		1 ex	
8.ヤマトシジミ	++[1♀]	++	++
9.ウラナミシジミ			1 ex Coll&Poss YI
10.アマミウラナミシジミ	[1♀]		
11.オジロシジミ		卵のカラ，幼虫 [4 exs]	
o 12.ウラギンシジミ	1 ex		
o 13.リユウキユウミスジ	1 ex	[1♂(1)]	1 ex
14.イシガキチヨウ			1 ex
o 15.ヒメジヤノメ		[2♂♂1♀]	
16.ウスイロコノマチヨウ		+[1♂, fae. Coll.KI]	[1♀(1), fae]

[記号] Iと同じ。ほかはfae.＝夏型， YI＝今村有紀子， KI＝今村啓子

(2) 名瀬市小湊 8月4日 (○:12:00〜13:00)

o 1.ナガサキアゲハ	1♀(2)
o 2.リユウキユウミスジ	1 ex
3.タテハモドキ	2 exs (1は花に)

(3) 名瀬市永田町〜永田墓地 8月15日(○のち◎夕立:10:00〜12:00)

o 1.オオシロモンセセリ	[1 ex] Coll. YI，幼虫(1〜2令 4 exs)
2.アゲハ	+
3.モンキアゲハ	+
4.ナガサキアゲハ	+(1-3)[1♀] Coll. YI
o 5.キチヨウ	+(0-1)[1♂]
6.モンシロチヨウ	+

○ 7.ヤマトシジミ	卄〔1♂〕
○ 8.カバマダラ	3 exs 〔1♀(0)〕
○ 9.ツマグロヒヨウモン	1♀
10.リユウキユウミスジ	1 ex
○11.ヒメジヤノメ	〔1 ex〕Coll & Poss. KI

(4) 飼育記録

㋑ ウスイロコノマチヨウ：15/VIII 1♀→三角紙内に10個産卵→19/VIII ～ふ化→失敗

㋺ オオシロモンセセリ：15/VIII L(1～2令)→飼育管理不十分のため1 exのこる→25/VIII 終令となる→2/IX 蛹化したが体から黒い液を出して死

㋩ カバマダラ：15/VIII 1♀(0)→18～20/VIII トウワタの葉表裏に25個産卵→ふ化せず卵はしなびてしまつた。

㋥ オジロシジミ：14/VIII 小さいサツマイモ畑にある栽培マメ科より卵のカラ(4個)と幼虫(4頭)→成長のおくれた1頭は脱皮中に終令によつて食われた→フジマメの実で飼育→22～23/VIII P(3 exs)→27/VIII A(2♂♂)，28/VIII A(1♀)

※ 名瀬市ではリユウキユウミスジの生♀を手に入れることだけを考えていたので，ほかの蝶については観察・採集がおろそかになつた。ついにリユウキユウミスジ♀はとれなかつたが名瀬市では蝶の好きな今村さん御一家に非常におせわになつたことを記して改めて感謝したい。

(参考文献・久保邦照(1961)：奄美大島の蝶類(義宮正仁親王殿下御来島記念誌奄美の生物研究報告，39－75)

〔1962年1月3日完了〕

(医学部　専1年)

沖　縄　で　の　一　ケ　月

坂　口　総之輔

原稿を書けと言われた時，何を書こうかと迷つたものでした。鹿児島大学はその位置から考えても，薩摩，大隅両半島、及び南西諸島に於ける科学的研究と、これらの地方の発展に寄与することが，大きな任務ではないかと考えます。私はまだ鹿児島へ来て日も薄く、大した成果もあげていませんので、１９５９年夏に沖縄を訪れた時の日記より、生物関係の思い出を織り込みながら、その大要を述べてみたいと思います。

７月２１日　（沖縄到着）

昨日、鹿児島を出港して以来２４時間、我々を乗せた那覇丸は静かに「泊」港外に仮泊した。ここで検疫，税関の検査後、引き船に引かれて桟橋へ。こうして、沖縄に第一歩を印した私達は、車で各々の宿舎へ向つた。旅館へ入つて休む間もなく、知人の招待で料亭へ行き、琉球料理に舌つづみを打つ。その後、彼の案内で首里城趾（現琉大の敷地）へ車を飛ばす。マニラ湾の夕焼けにも劣らぬと言われるくらいで、さすがに、遠く慶良間諸島の向うに沈む夕日は、空を真赤に染め、夕やみ迫る守礼門を通して、ちかちか瞬く那覇の灯を眺める光景は、とうてい私の筆の及ぶ所ではなかつた。

７月２５日　（名護方面へ）

那覇より名護までは、完全に舗装された一号道路をつつばしる。今日は尙氏の案内で、彼の農園を見学することにしている。さすがに、高級乗用車の乗心地よく、疲れを覚えない。途中に二大海水浴場があり、多くの米人も集つていた。土地の人々は、道端に貝殻の土産物店を出していた。私達は車を停め、それらの貝を見てまわつた。ホラガイ，スイジガイ，クモガイ，サソリガイ，チヨウセンフデ，キバフデ，その他数々の貝殻やサンゴ類が並んでいる。我々も御土産に前述の貝の他，ウミウサギ，ホシダカラなどを買つた。この二つの海水浴場、すなわち、月の浜と伊武部海岸の間はとても景色のよい所である。さらによいことには、この辺の海岸では貝の採集もできることである。沖縄では最近、採集に適した土地が少くなつてきているようであるが、谷茶の浜など、この附近では、タカラガイ，イモガイの類を中心にかなり有望だ。やがて名護町に入る。名護は本島北部の最大の町で、町の中央にはこの町の象徴であり、天然記念物に指定されているビンブン木（ガジユマル）の大木がつつ立つていました。この木は今次大戦の戦火から免れたそうで、昔の写真と比べると多少小さくなつた感はあるが、おゝよそ原形を保つていた。

車は名護より左に折れて、本部半島中央部の伊豆味へ向う。山間部に入ると谷川に沿つた両岸の山肌は切り開かれ、一面のパインアツプル園である。所々にバナナも見える。附近一帯の樹木はほとんどが、亜熱帯樹なのであるが、谷を吹く風はひんやりとして、その風景は何かしら故郷の山村を思い出させるものがあつた。尙氏の農園で昼食を済ませた後、農園を見てまわつた。広大な谷間を切り開いて畑地が造られている。内地では見られぬ程、背丈の伸びたみかんの林や柿の木もある。沖縄ではここが最も果樹の種類が多いのではないかと思われた。まるで、どこかの植

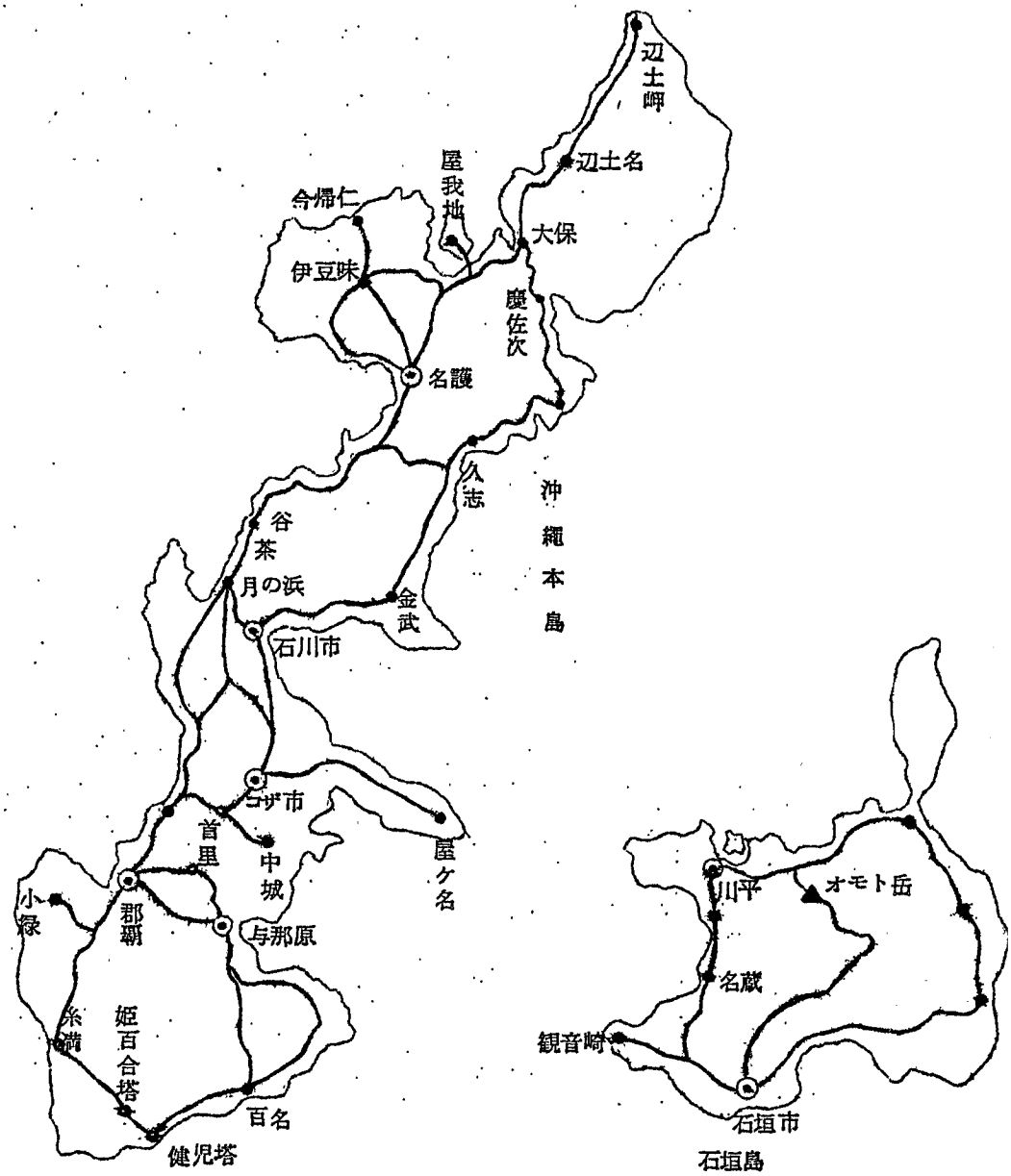
物園を見ているようである。美しく手入れされた木々の間をウスイロコノマやナガサキアゲハ，リユウキユウアサギマダラ，カバマダラなどが飛び、谷川沿いには、シジミチヨウ，ヒカゲチヨウ，ジヤノメチヨウの類が舞つている様子は幻想的であつた。伊豆味を後に屋我地島へ。一名沖縄の松島と呼ばれるこの地は、半胎生植物，メヒルギの群生地としてよく知られている所である。半胎生と言われるのは、実が樹上にあるうちに胚珠が発達して、あたかも槍の穂先のような実が地上に落ちると、地面に突きささり、そのまゝ根を下ろすという代物である。面白いことには、この木は、海水と真水が混じ合う場所に好んで生育し、干潮時には陸地に、また、満潮時には水中に生えているのである。私はもし満潮時に実が落ちたらどうなることだろうと考えた。父に説明を聞いた後、実際に実験してみることにした。実を一つ取つて、水中に落してみた。どうだろう。驚いたことにまつすぐに立つて浮いているではないか。つまり、落ちた姿勢そのまゝで波間に漂い、実の先が地面に触れるや、すぐ根を下ろして生育するのである。本部半島で一日を過ごした私達は、その夜は名護に泊つた。

7月26日　（名護より辺土へ）

9時頃小型タクシーで辺土岬へ向う。この辺より北部（国頭地方）は地質学上は、古生層と言われるだけに、南部地方とは趣を異にし、海岸まで山が迫り、沖縄本島の山岳地帯を形成している。（500メートル前後）村落の様子は南部のそれとはかなり異なり、小さな谷間などに、防風林に包まれた緑の村落が散在し、写真に見る戦前の形体が残つているようであつた。正午には辺土岬へ到着した。岬の周辺は断崖になつており、すぐ下には東シナ海の水が、岸にそつて発達したサンゴ礁に白く砕けるのが見える。反対側には辺土岳がそそり立ち、側面はこれまた断崖となつて私達に迫る。私達は二つの断崖に囲まれた海岸段丘の上に立つているのだ。海岸線には数百メートルもあろうか、サンゴ礁が沖へ広がつていて、底まで透いて見える浅い部分から、少し黄緑に濁つたように見える部分、さらに淡い空色、濃い空色、紺から黒へと深さが加わると共に、幾段階かの色層に分かれて広がつて行く海。そして、地平線では空と一体になり、その附近には真白な入道雲が浮んでいた。また海に突き出た断崖の先端には緑というよりは黒々としたソテツが育く澄んだ空をバツクに繁茂している姿は、一幅の油絵を見ているようで、夢の国へ来たかのようである。ここで美しいという言葉で表わされるものは数々ある。アダンもその一つであろう。アダンは南西諸島方面に広く分布しているもので、沖縄ではあちこちに見られるが、数こそ少いけれども、この附近のアダン程大きなものはあまり見かけない。樹上に橙の実（子供の頭ほどもある）がぶらさがつているのは誠に見事である。今となつては笑い話に過ぎぬが、戦時中、日本兵がパインアツプルと間違え、飛びついたそうである。あの美しい容姿についふらふらとなるのも当然だろう。そこで私も物は試めしとばかり、一口やつてみた。何の事はない。水臭いばかりで食えたものではない。そんなことはさておき、我々は採集せねばならぬ。周囲の琉球松やソテツの間を縫つて、石ころをひつくり返しては陸産貝を採集する。貝や植物は専門でない関係上よく知らぬが、ケマイマイ類やヤマタニシ、それにキセルガイの類など十数種が得られた。ちようど二回の発生期の中間で、半ばあきらめていたのであつたが、蝶もかなり目についた。殊にツマ

ベニチョウが多い。沖縄ではとこほど多くのツマベニを見掛けたことはなかつた。また、アカタテハモドキ，ツマグロヒョウモン，リュウキュウアオスジアゲハなども多く，シロオビアゲハ，ウスキチョウ，ナガサキアゲハなどもちよいちよい見掛けた。これらの他にはキチョウ，アカタテハ，モンシロチョウなどもおり、入り混つて乱舞する姿は実に見事なものであつた。

沖縄に於ける採集旅行地



7月27日 （石垣島へ）

午前10時CAT機で那覇空港を発ち、石垣島へ向う。我々を乗せたDCⅢ型機は、高度2千メートル前後を飛んでいる。小さな窓からは時々白い雲が見える他、なにも見えない。降起サンゴ礁でできていると言われているだけあつて、さすがに平扁な宮古島が約1時で見えて来る。宮古島で約30分休憩の後、再び機上の人となつた。さらに1時間で石垣島に着く。この島は宮古島と異り、西表島などと同じ地層で、古生層から成つていると言われ、機上からもゴザ岳や舟越附近の山、それに、川平湾周辺の山々が望まれる。出迎の人の案内で旅館へ。休む間もなく車を呼んで、石垣島一周の見物に出掛ける。サンゴ礁からできている部分では、小さなウヴアールやドリーネの様なものもあり、幾つかの鐘乳洞もあるようだつた。また海岸線には野生のパパイアが青い実をつけているのも見られる。山間部を通る時には、野生の数種のヤシや大きなシダが群生していて、南国に来たと言う実感がわく。車は川平を通り、ある開拓部落に入つた。戸数にして十数戸もあるだろうか。この部落の広場にはパインアップルが積みあげられてあつた。よく見るとそのパインに数知れる蝶が集つているではないか。これ幸いとばかり車を飛び降りた私は山積みにされたパインの周りをぐるぐる回りながら採集を始めた。アオタテハモドキが最も多くアカタテハモドキ，リユウキユウムラサキ，メスアカムラサキなどの蝶が集つていて、追つても追つてもやつてくるのである。気がついて見ると、いつの間に集つて来たのであろう、私は部落の子供達に取囲まれていた。ちようど私達は台風の過ぎ去つた後へ行つたので、これ程うまく採集ができたのであつた。というのは、パインは成熟期に台風に見舞れると、成熟が早められ、一時に多量のパインが熟するのである。この時も、一時にパインの収穫が多くなつた為、島の加工工場ではさばき切れずに、山積みにしたまゝ腐らすといつた状態であつた。これが私には幸して蝶の採集は楽になるし、パインはタダで食べられることになつたのである。このようにして、その日は宿に引き返したが、車窓からはオオゴマダラやモンキアゲハ，リユウキユウアサギマダラ，シロオビアゲハ，ナガサキアゲハなどが見られ、バン（鳥）がヒナを連れて、よちよちと道を横切る姿もかわいかつた。また名蔵川の川口には見事なマングローブ（オオバヒルギ）の群落も見られた。

7月28日 （オモト岳へ登る）

山麓を切り開いたパイン畑を抜けると、ヘゴや大リユウビンタイの茂る山道へと入る。実に見事なものである。15分も歩いたろうか、谷川に出る。私はこの近くの石の下にサソリなどを発見し、数匹のサソリや大きなムカデなどを採集したのであつた。これから先は常緑樹の繁茂するジヤングルになり、樹上にはセツコクの類やオオタニワタリなどがくつついていた。この時運悪くスコールに見舞われた。ズブ濡れになりながら登る。やがて足首が痒くなる。靴下を上げて見ると、ヒルである。見回すと深く積つた木の葉の上に、内地のものよりはずつと小さなヒルが、敷き詰めたように頭を持ち上げているではないか。私は身ぶるいをしながらも頂上を目指した。時々、キノボリトカゲが愛嬌をふりまく。頂上一帯はヤンバル竹の林になつていて、一部分開けた所がある。いつの間にかスコールも通り過ぎ、南国の太陽が照りつけるけれども、高度五百メ

ートルを吹く風は、かなり涼しく感じられた。帰りは来た道を９０°に折れて道なき道を進んだ。途中、偶然にも木の根元にうずくまつているサキシマハブを発見し、持ち合わせのビールビンに詰込む事に成功し、無事持ち帰ることができた。下山後、谷川の清流で顔を洗い、草に目をやると蝶がいるではないか。コノハチョウである。私はすぐネットを引きよせる。一匹ではない。二匹も三匹もいる。私は苦労することもなく四頭を手にした。一頭は小破していたが、他の三頭は完全であつた。この日の収穫は、コノハチョウ四頭とアマミウラナミシジミ五頭をあげることができよう。大いに気をよくした私は川平湾に行き真珠養殖場を見学し、シヤゴウやシヤコガイなどを手に入れたほか、オオゴマダラ，リユウキユウアサギマダラ，タテハモドキなどを得ることができた。

７月２９・３０日

２９日は、この地の貝類研究家として知られる瀬名波氏などを訪問する。この時にはこの島で知り合いになつた米人、スージー・グロスさんやキヤンデイ・マークスさんも我々と行を共にし南方産の貝類をもらい、大へん喜んでいた。スージーさんは沖縄コザ市に住んで居るのだが、彼女は長い間、貝を集めて来たそうであつたし、キヤンデイさんは高校生で夏休みに本国より遊びに来たとのことであつたが、彼女のマザーが、貝を集めているのでいいお土産になると言つていた。あちこちを訪問するたび、国際色豊かな歓談風景が展開され楽しい一日であつた。翌３０日我々は石垣島を後に本島へ向つた。このように私は、見学に採集に忙しい毎日であつたが、楽しい２５日間の沖縄滞在を終え、８月１５日夕刻沖縄を後にしたのであつた。沖縄に関しては、まだまだ書かねばならぬことも数多く有りますが、それはまた次の機会に譲ることにして、最後に、滞在中、お世話下さつた方々に心から謝意を表したいと思います。　　（農学部１年）

屋久島の蝶類採集記

橋元紘爾・肥後昌幸

再度採集記となつてしまつたが、本島についての事は成見君によつて書かれていると思うのでここでは略する。まとめる事はなかなか難かしくどうも要領を得ないままになつてしまつて読みにくいだろうがお許し下さい。

＜日時，コース，雑感＞

１９６１年７月２６日、夜９時第２０折田丸で鹿児島港を出航。

７月２７日（晴）朝８時，安房上陸，１１時ごろまで付近採集、以後小杉谷へ向う。５時半着

○何分最初の地で方向がさつぱりわからず人が行く方向へ行くことにした。なんとなくトロ線路を見つけ登山者に聞いた方法で重いリュックサックをトロに頼む、そうするうちに露もだんだん乾き始めソロソロ９時、ツマの赤いシロチョウ科を二人でただ御見送り、

○ツマベニチョウについて・・・吸蜜植物として普通にクサギの花，他希にイトウリ，サンダンカ，ブツソウゲ，ハマオモト等で吸蜜も認められる。

本種の習性として飛ぶのが早いと言うのが通例のようであるが、我々が見た全て少なくとも（屋久島）はそう早いと感じない。高く飛ぶのは通例で別に急いで飛んでいる本種は認めなかつたようである。又日中と雨の時は樹陰に行くようだ。

裏面の模様は枯れ草に似ていないでもないが枯れ草等枯れたものに止まつたのを見たことはない（裏面色模様が似ている）

○問題のカバマダラのことであるが，安房にては多数発生し、卵，幼虫，成虫，共に多い。ほとんどのトウワタに卵，幼虫が認められる。多産するのは安房小学校付近、所が宮之浦では全然見当らなかつた。トウワタは見つけ次第調べてみた。日数もうんと多いのに、やはり迷蝶か？それとも安房では越冬出来たか？証処はない。

○小杉谷への道ではアマミウラナミが極多産他はほとんどいなくヤクルリは見なかつた。スミナガシ，イシガケチョウ，ミヤマカラスアゲハ，アオバセセリ等が次につぐ、又不確実な記録ではあるが(1)安房小学校校庭にてメスアカムラサキ♀目撃。地面に止つたり飛んだり、後翅にある黒いすじも認めた。何分、カバマダラの産地で疑われるのも無理はないと思う。（K・H）(2)約２Km位い行つた所（安房港より）でヤクシマミドリシジミ１♂を目撃裏面銀白色、K・H、表面金緑色、裏面銀白色、M・H、がそれぞれ認めた。

○ウスイロコノマ夏型、小杉谷にて、目撃、夕方７時３０分

７月２８日（雨），６月３０分、花之江河へ向う。１時着，以後付近採集

○トロ線終点付近は特に注意してヤクシマミドリシジミを待つたが、雨が降り、食樹は２本みられるだけ、どう石をなげて見ても飛び出すものはなかつた、時期的には良いと思うが、天候は悪い、石をなげてみた、しかし認められない。この結果からは産否は言えない。（天候の問題で）

最近になつて福田晴夫先生に話してみると、"そうかんたんに絶滅することはないだろう"と言われる。

○ヤクシマルリシジミは早朝から普通に産する。吸水したり，イボタ（？）の花に認められる。

○タツパンルリシジミも注意していたが，本種と思われるものは見ない。７月２９日も同様であつた。

○花之江河ではツマグロヒヨウモンとヤクシマルリシジミを一頭ずつ、他に何も見なかつた。

７月２９日（雨）花之江河７時３０分→歩行→１２時着小杉谷１２時２０分発→トロにて→安房１時３０分着，安房小学校で一泊。付近採集。

７月３０日（曇つたり降つたり）３時まで付近採集。以後バスで宮之浦へ。屋久島高校の寮に鹿大生の高橋さんにお世話になり入れてもらえた。以後８月５日朝まで台風の為身動き出来ないままここに泊まる。

７月３１日（雨）

８月１日（台風），ツマベニチヨウは見られる。

８月２日（雨），タテハモドキ多数，田でも海岸でも多い。

８月３日（晴）

８月４日（晴）

○ギンモンウスキチヨウ（１♀）目撃。K・Hの前を早く飛びクサギの花に止まろうとしたがそのまま去つていつた。

○リユウキユウムラサキ（１♀）目撃。昼ごろ前記のギンモンウスキチヨウを見送つてすぐイモ畑のタテハモドキを見ていたら，クロコノマのような飛び方で大型の本種が飛び出した（KH）K・Hの後、MHはアオタテハモドキ（１♂）を採集し、気を良くして田の辺りを歩いていたら、このリユウキユウムラサキを見た。何回か網を振つたがとうとう自然界へ生活するままだつた。

※　我々は主に安房と宮之浦だけの採集しかしていない。前にも書いた台風の為である。しかしこの地方はよく調べることが出来たかも知れない、そこで一部を安房と宮之浦と比較してみる。

種　名	安房	宮之浦（卅多い，廿普通，＋少い，－見られない）
カバマダラ	廿	－
アマミウラナミシジミ	卅	＋
アオバセセリ	廿	＋
タテハモドキ	－	廿
ツマベニチヨウ	廿	卅
スミナガシ	廿	＋
ルリシジミ	－	＋

不十分な調査の結果かもしれない。単に我々の記録を中心としたものである。
又シバハギは安房，宮之浦ともに多数、にもかかわらずタイワンツバメシジミは見られなかつた。ただしシバハギの状態はツボミもまつたくない、若すぎる状態。ミヤコグサは安房宮之浦通じて全々見られない。ヤハズソウは極多数自生している。しかし、シルビアシジミは認めていない。

採集記録

ここにあげたほとんどはK．Hのものである。M．Hののをあげなかつたのは、M．HとK.Hの連絡不十分のためである。しかし記録種類はM．Hのものも全部あげた。又この記録を書く為の地名はあまりにも粗で莫然過ぎると思うがこれ以上知ることは出来なかつた。

〔略号〕・地名；安房(1)〜小杉谷(2)〜トロ絡点(3)〜花之江河(4)，宮之浦(5)

・個体数；卌多い，廿普通，十少い，と記す。

〔筆記順序〕；種名，採集（目撃）日，採集，目撃頭数，採集場所，個体数，Coll.Poss.（特に書かない限りK．H）とする）

PAPILIONIDAE

o Byasa alcinous KLUG 1836，（ジャコウアゲハ），Ⅶ．3，1♂，(5)，十；Ⅶ.28，1頭，(3)，十，

o Graphium sarpedon nipponum FRUHSTORFER.（アオスジアゲハ）
Ⅶ.30，1♂，(1)，卌；(5)，卌

o Papilio xuthus LINNÉ（アゲハ）
Ⅶ.30，1♂，(1)，卌；Ⅷ3，1♂1♀，(5)，卌；(2)，卌，

o Papilio machaon hippocrates FELDER et FELDER（キアゲハ）
Ⅷ.3，1♂，(5)，卌；(1)，(2)，(3)共に卌，

o Papilio protenor demetrius CRAMER.（クロアゲハ）
Ⅷ.1，1♂，(5)，卌；(1)，(2)，共に卌；(3)，十．

o Papilio memnon thunbergii SIEBOLD.（ナガサキアゲハ）
Ⅷ.1，1♂，(1)，卌；(1)，(2)，共に卌

o Papilio helenus nicconicolens BUTLER.（モンキアゲハ）
Ⅶ.30，2♂，(1)，卌；Ⅶ.31，1♂1♀，(5)，卌；(2)，卌；(3)，卌，

o Papilio maackii satakei MATSUMURA.（ミヤマカラスアゲハ）
Ⅶ.27，1♂，(2)，十；Ⅷ.3，3♂，Ⅷ.4，1♀，(5)，卌

PIERINIDAE

o Eurema laeta bethesba JANSON（ツマグロキチョウ）
Ⅶ.30，1♂，(1)，卌；Ⅶ.31，1♂，2♀，Ⅷ.1，1♂1♀，Ⅷ.2，1♂，Ⅷ.3，1♂，Ⅷ.4，1♂，(5)，卌．

○キチョウと共にアレチノギク（未同定）の花に群がるのが目立つ（宮之浦にて）。

o Eurema hecabe mandarina de LORZA（キチョウ）

VII.27，3♂1♀，(1)，VII.30，4♀，(1)，卄；VII.2，1♂，(5)，卄

o Pieris rapae crucivora BOISDUVAL（モンシロチョウ）

VII.27，1♂，(2)，＋；(1)，(5)共に＋

o Pieris melete MENETRIES（スジグロシロチョウ）

VII.4，1♀，目撃(5)

o Hebomoia glaucippe shirozui KUROSAWAetOMOTO（ツマベニチョウ）

VII.27，1♀，VII.29，1♀，VII.30，1♂1♀，(1)，卄，(2)は上に登るにしたがつてだんだん少なくなる、安房のつり橋より約1Km位いまで見られる；VII.31，3♂2♀，VIII.1，1♀，VIII.2，2♂，VIII.3，9♂4♀，VIII.4，4♂1♀，(5)，卄.

DANAIDAE

o Danaus chrysippus LINNE.（カバマダラ）

VII.27，1♀，(1)，卄，M．Hによつて VII.29，VII.30にも数頭採集された、又卵、幼虫等数十頭を採集，羽化率は飼育中の失敗で悪かつた。

SATYRIDAE

o Ypthima argus BUTLER（ヒメウラナミジヤノメ）

VII.29，1頭，(1)，卄；(2)，(3)，(5)，共に卄.

o Mycaresis gotama fulginia FRUHSTORFER（ヒメジヤノメ）

VII.30，1頭，(1)，＋；VII.31，1頭，(5)，＋.

o Neope goschkevitschii MENETRIES（キマダラヒカゲ）

VII.27，2頭，(2)〜(3)＝小杉谷の事務所内，＋，

o Melanitis leda LINNE.（ウスイロコノマ）

VII.27，1頭目撃，(2)〜(3)＝小杉谷，＋；VII.30，1♀，(1)，卄；VII.31，2♂，VIII.3，1♀，(5)，卄，

o Melanitis phedima oitensis MATSUMURA（クロコノマ）

VII.27，目撃（頭数不確認）(2)〜(3)＝小杉谷，卄，又 M．Hによつて(5)にて1頭採集されている。

NYMPHALIDAE

o Dichorragia nesimachus nesiotes FRUHSTORFER（スミナガシ）

VII.27，1♀，(2)，卄；VII.30，1♂，(1)，卄；(5)，＋.

o Cyrestis thyodamas mabella FRUHSTORFER（イシガケチョウ）

VII.29，1♂，(3)，卄；(2)，卄，

o Vanessa indica HERBST.（アカタテハ）

VII.30，1♂，(1)，＋，(2)，＋

o Kaniska canace no-japanicum SIEBOLD（ルリタテハ）

VII.2，1頭目撃，(5)，＋

o Precis almana LINNÉ.（タテハモドキ）

VII.1，1，VII.2，2，VII.4，15，(5)，卌

o Precis orithya LINNÉ.（アオタテハモドキ）

VII.4，1♂，(5)，この一頭のみ，Coll.M.H

o Hypolimnas bolina philippensis BUTLER（リユウキユウムラサキ）

VII.4，1♀目撃，(5)

o Hypolimnas misippus LINNÉ（メスアカムラサキ）

VII.27，1♀目撃，(1)，不確実なものであるが一応書いてみる

o Argyreus hyperbius LINNÉ.（ツマグロヒヨウモン）

VII.28，1♂，(4)，＋；(1)，(2)，(3)，卌

LYCAENIDAE

o Arhopala japonica MURRAY.（ムラサキシジミ）

VII.29，1♀，(1)，＋；(2)，＋

o Arhopala bazalus turbata BUTLER（ムラサキツバメシジミ）

VII.27，1♀，(1)，＋；VII.30，1♀，(1)，＋；(5)，＋，

o Zizeeria maha argia MENETRIES（ヤマトシジミ）

VII.27，1♂，VII.29，1♀，VII.30，1♂1♀，(1)，卌；VII.28，1♂，(2)，卌；VII.4，1♀，(5)，卌，

o Celastrina argiolus ladonides de l'ORZA（ルリシジミ）

VII.3，1♂，(5)，＋，

o Celastrina puspa umenonis MATSUMURA（ヤクシマルリシジミ）

VII.28，5♂1♀，VII.29，1♂1♀，(3)，卌，

o Celastrina albocaerulea MOORE（サツマシジミ）

VII.28，1♂，(3)，＋

o Iampides boeticus LINNÉ（ウラナミシジミ）

VII.29，1♂，(1)，卌；5，卌，

o Nacaduba kurava septentrionalis SHIROZU（アマミウラナミシジミ）

VII.27，11♂1♀，(1)〜(2)，VII.29，4♂3♀，VII.30，4♂4♀，(1)卌；VII.4，1♂，(5)，＋，

CURETIDAE

o Curetis acuta paracuta de NICEVILLE.（ウラギンシジミ）

VII.1，1♀，(5)，＋；(1)，(2)，＋

HESPERIIDAE

o Choaspes benjaminii japonica MURRY（アオバセセリ）

VII29，1♀，(1)，卅；(2)，卅，(5)，＋，

o Pelopidas mathias oberthuri EVANS（チャバネセセリ）

VII27，1，(1)，VII29，1，卅；(5)，卅，

o Paranara guttata BREMER et GREY（イチモンジセセリ）

(5)，卅；(1)でも，たぶん産すると思うが記録していない。

o Notocrypta curvifascia FELDER et FELDER（クロセセリ）

VII29，1，(1)，＋，Coll.M.H；VIII3，3令幼虫1匹，(5)，＋ Coll. Shinobu Hidaka.

以上目撃を含めた41種を屋久島にて記録した。

農学部1年　橋元紘爾
教育学部1年　肥後昌幸
（文責　橋元）

屋久島採集紀行（1961年）

成見和総

7月21～22日　鹿児島～一湊～宮之浦

21日午后9時一星空に、別れを告げるドラの音に、我今、はつと感ずる　屋久島行を永年の念願かなつて、多くの期待を持つて10日間予定の（実は15日間となつてしまつた）出発だ。実は26日、鹿大生研のメンバー2人と同行の予定であつたが、香月小の老海原先生の推めもあつて、又小生自身、一日も早く行きたい気持だつた故、22日出発となつたのだ。自宅（志布志湾）附近の波が、少し荒れていたので、ひよつとすると出港とり止めかもと不安の中に上鹿したのだつた。快速舟20折田丸が出るとのことで、それを利用するのだ。港にはもう多くの人々が集まり、甲板も一ぱいの人々である。学生生徒連中の多いのは、明日から夏休みというのと合致したためで、残念に思う。調査不足のため、切符売場でわかつたのであるが、宮之浦便はないらしく、一湊港にて下舟と改定する。岸には、多くの見送り人があり、テープの波には、初出港の小生には珍らしかつた。やはり拡声器から流れる別れの曲のメロデーには、何となく、10日余り本島を離れる我が身に、じんとくるものがある。湾内において、静かに鹿児島市の夜景を横にながめつゝ上からの城山の景色と対比するのもいいと、今せつに感ずる。水面に写つたネオンのゆれ動く姿が印象的だ。

2時間余の状快さも佐多岬の燈台灯の消える頃になると、波は大きく振れ始め、初の舟長旅(?)の吾が胃の辺　正常さを失い始める心地・・・。藍一色のこの世間より時たま現われる光る月光に、白波のキラリと巻き返す姿は、フワンとした気分を細やかながら支えてくれる。雲，波間に見える星2つ3つ、心の星も振れ始め一天は星のダンスと変りにけり・・・。甲板に雨しきりに

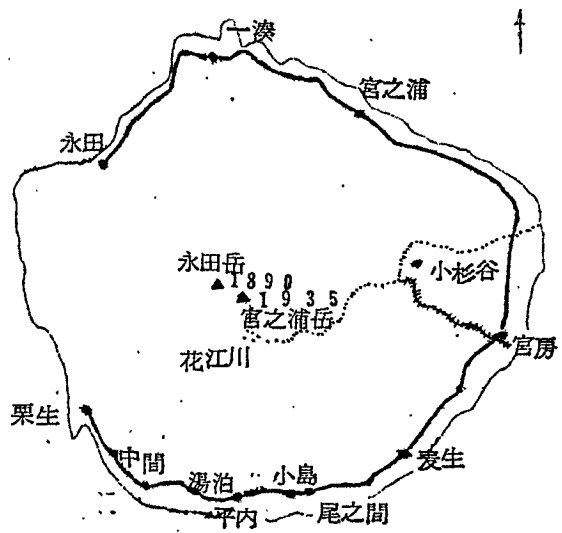
降り始め、時たま波のしぶきを浴せる。地下（階下）に下り行く吾が胸に戦い始めるこの不安さ・・・胸ムカムカするにこの時をこそ人の云う舟酔いと吾切に知る。洗面所の辺、同胞の多きこと、人並と苦笑する。　“平気にて高笑いせし人の憎らしさ—”初めての舟長旅の試とて、くすり飲まずして、苦労せし人のアホらしさ。

今、唯私の望むのは、珍品も何のその、早く一湊に到着してくれのみ。　いつの間にか、ムカ々々もうすれつゝ、楽な気持になるをおぼろに感ずる。いつしか、深き眠りに入りにけり・・。「ヂン，ヂン，＜，！」という、けたたましい音と人のザワメキに目を醒す。一湊到着を直感する。気分は正気だ。リュックを背おう我が身の喜こび、ついについたかと、一早く窓外を見る。ボンヤリしたアイ色の闇の中に、２檣の小舟の姿　彼方に燈がかすんでいる。これが例の艀なのだ。これのために、ちょつとの荒波に、寄港を中止しているのだ。途中で降り始めた雨は、この艀の辺より強い降りとなり、数分後上陸した時は、雨具のとり出す間もなく、びつしより。さつそく名物の大雨に歓迎されたらしい。

運良く女学生を迎えに来ていた、折田汽船の小型四輪にて、宮之浦まで、振れる三輪の中で歓迎の早かつたことに四人苦笑する。十分もすると、それこそ大びつしより（上衣などはタタケバトビチル水タマリ）その後くる冷えこみには、すごい、すごく寒いのだ。

屋久島に真夏きて、寒いとはこれいかにだ・・・しかも平地で・・・。

屋久島高校についたのは午前３時、車をおりてまだ上舟の気分が抜け切つていない。午前３時、宿直の方との話の後、４時、着換えてさつぱりしたところで、極楽昇天　　。



屋久島概略図

７月２３日　　８時３０分起床　　宮之浦

目をこすりつゝ外に出る。「ツマベニが！」という弟等の声がする。その辺を低く高く強い白翅でもつて朝の散歩を試みているらしい。同行の３人はもう追いかけている。何も急ることはない、武蔵でいこうと落付。

天候はさつぱりしない、曇というところ、どうも山の方を眺めるに、怪しい雲行—。山の姿さは一見してぐつとくる。何となく心が弾む。予定の鮫掛先生電話で知り驚いてとんでみえる。よもや夜便では又あの波の状態では、今日の昼便だろうとのことだつたらしい。さつそく、先生宅へ向う。屋久島高校は宮之浦の町の外れ安房側の松に囲まれた静かな所にある。宮之浦の町の中心にある先生宅への途中、ツマベニが特意の翅ぶりして、あちこち飛んでいる。バナナを back

にやはり南国の気分十分だ。今を盛りのクサギの花に、ナガサキ，クロ，モンキ，アオスジ，アゲハ等のアゲハ類が吸蜜に来ている。荷物はないので、ぼつぼつ採集して行く。モンシロ，キチョウも数頭見られる。宮之浦小学校前で、ルリボシヤンマを目撃、前翅の黒筋が彩やかだ。シオカラ，オオシオカラトンボも本地におとらずいる。やはり、普通種でも、ハツと思うのは、大部緊張しているらしい。落ついて<。空中体をサツトやりたかつたが、ツマベニ一号はクサギ上の奴をいただく。手下にもつ、ツマベニも美くしい。傷は少しながら、色さめている。亀足で先生の家に着くまでに2頭 他の3人も各々採取している。弟なんか大喜びだ。初見、初の記録とあつて気持がわからんでもない。先生宅にて夫妻の親切なもてなしに、昨夜のあの不快さもふつとんでしまう。どうも今日は一日中雨が続く様で休憩とする。庭先に咲いているサンタンカの紅黄の花が、一つ特に目を引く、K先生の話ではこれにもよくツマベニがくるとの話一。

休憩とはいえ、雨中とは云え、じつとしておれない腕のむずつき、カツパを付けてトンボめざして附近の宮之浦川を上つてみる。やはり雨降る中には虫も駄目だ。時たまシオカラトンボが同情してか姿をみせてくれる。一頭はとつてやる。ちよつと木蔭に行くと、オオシオカラトンボが、力を持つているらしく、特等席所に静止して時たま上を飛んでいる。又再び川辺に出ると砂地に、シロヘリハンミョウが多数発生している。4，5頭採集しておく。もうネツトもビツシヨリなつてくつついている。ハツと思つてふり向くと、シオカラトンボガツカリ・・・。ちよつと小降りになり明るくなつてくると、どこからともなくツマベニの姿が山辺で見られる。しかし高い速い。次に4人一諸に高校の方に行く。さっきのクサギの大木でしばらくがんばり、ツマベニ，ナガサキ，モンキ，アオスジ，クロ等のアゲハ類，ツマグロヒヨウモン等を採集。サツトうす暗くなり小雨が来ると、まずツマベニがどことなく山手の方に姿を消す。他の類は少し位雨が降つてきても知らん顔して盛んに吸つている。やはりナガサキが多い。アゲハ，モンキ，クロ，アオスジ類又キチヨウ，ツマグロキチヨウは多い。ツマベニの内地のモンシロチヨウとは、まさにその通り、モンシロチヨウ2頭に対し、ツマベニは多数。キアゲハも南国的スピードで通り過ぎる。アカタテハもやつれ姿を示す。ツマベニの幼虫採集中はからずもギヨボクで、キボシカミキリを見つける。7，8頭の三角紙のツマベニは、ほとんど傷を負つている。ギヨボクは多くあるが、幼虫は見つけ難い2令2頭。弟等が、おそらくガの一種であろう幼虫を見つけて、「多くいる」とは、最初は迷つた。

夜は歓迎会として高校の先生他3人をまじえてビールの乾杯。かつて、これほどの量の経験はなく不安の中にどうにか一人前にふるまう。どうも最初は先生達ばかりで勝手がわからぬ。しかし、この気分のよさ、うち溶けて年齢とわず同等にふりまえるのは、この種の特徴かを知る。話がなかなかはずむ。屋久島の全望も握めた気分だ。やはり教師の集まりである最后は、教育の話で楽しく思う。教師としてのことで学生の小生に説教じみてくる、先輩の忠告として傾聴する。気楽に話せて気持がよい。

7月24日　宮之浦～安房～小杉谷

曇の天気でどうにかうまく行きそうだ。昨夜の計画通り、8時20分宮之浦発のバスの人とな

る。安房より小杉谷までの予定なのだ。このバスが、島の唯一の交通機関らしい。途中、車内から　ノマヘニ，アゲハ，モノキ，ナガサキ，クロ，アケハの多かみられる。かなり遠くにいてもすく目につくのはノマヘニチョウだ。乳白色の羽をはばたかして一きわ美しい。しばらく、ゆられて進むと、海岸線に沿つて一広場　砂場が見られる。K先生の説明によると　数年前使つていた飛行場という。そういえば出発前　英語担任の押川先生の話にあつた。粗末だけど、うまくやれば使われる様にも感じられる。今　工事中らしい。数年後には、大分便利になるだろう。バナナかあちこちの庭先に見られる。大小の実をつけている。まさに南国の気分だ。1時間数十分して、安房の町、大型のつり橋にて代表されよう。海の色目前に迫えたデラノクスぶり。安房　ここが一応小しんまりとして一番絵まつた屋久島の町だろう。町中を又　安房川を、つり橋に沿つて、渡るノマヘニの姿は美くしい。ある程度の腹こしらえをする　採集用具のみの軽い服装となり、残りの荷物は小杉谷登山口にて、トロノコにたのむ。

身も軽く、いよいよ今日の採集の開始だ。下の方ではノオカラ　オオノオカラトノ＋，マユタテアカオ　や　ムラサキノノ、，キチョウ，チヤノネセセリ，アマ、ウラナ、ノノ、，ウラナ、ノノ、等が見られ、又、ス、ナガノが、樹液にススメノチ等とたわむれている。ギョオクとノマヘニは途中ですく姿を消し。キチョウ，ノマグロキチョウ，スノグロノ。のノロチョウも見られる。ものすごいスピードで近くを通り過ぎるのは　アオノセセリである。苦労して捕つたが　しばらくして3頭採取出来た。道に沿つてヒメウラナ、ノヤノメ，ヤマトノノ、，アマ、ウラナミノノミ，少し進んでヤクノマルリノノ、　又，ルリノノ、はわずか1頭見られた。特に、路線の谷川との交叉点の橋付近の広葉樹にとひかうノノ、は　決まつてアマ、ウラナ　である。ノノミ頭には、タノノノ　ノルヒヤと珍も考えられるので、最初から確実にとらえることにする。4km辺にて、高くやや敏速に飛ぶ奴、これは唯ものではないと、できる限りの力でもつて追つかけて2回の軽振りの後、やつと手に入れたもの、サノマノノ、とはカノカリするが　当地では初採集品で駄つて三角紙へ　　。　この辺でも下の方では樹液に来ているス、ナカノ又、時たま　ヤブから追い出されるクロコノマや、ウスイロコノマもネノトに入れる。ノマグロヒヨウモノはここでも多い。トロ道の両脇を木々で暗く囲まれた辺にて、クロセセリが飛び出す。ミヨウ　もあちこちに見られる。イノガケチョウの姿もここにくると　いつそう特色あるチョウに見える。少し小型でスマートに感じられる。E先生が元気よく追つている。一方甲虫の方は、名も知らぬ小さき花にタタキア、によつて　ヨノスノハナカミキリ，フタオヒ、トリトラや　ヒメトラハナムグリ，ハナムグリ等が落ちてくるのみ。ハノ、ヨウがずつとミチノルへする。時たま特急アオスノにひつくりさせられる。とうにか今迄曇を保つていてくれた天気も昼食をかしつていると雨となる。とうせぬれる覚悟ではあるが、食つて急にはと　いうことで　10分間位岩かけに雨をしのきつゝ休む。遇然アオノセセリが自分もと、云わぬばかりTの帽子にとまりあわてる姿に大笑い。道路に沿つて適当にあちこちに清水が流れているし　水には不自由しない。便利にできている。突然コオーノという音と共にトロの一群が降りてくる。大きな材木を積んでいる。ヤクスキらしい。7，8両目に白旗をなびかせている。これが最後の印と気つく。すごいものだ。これで

もつて山奥から切り倒した材木を下へ運ぶのだ。食事で元気づいた5人は余り調子にのつて足だけ速くなつた様で、1人ゆつくり採集しながら尾行となる。いそうな所をスピード出しちやもつたいない。7，8Km地点でムラサキツバメを採取したK君が喜こんでもつてくる。最初はヤクシマミドリかと思つたという無理ない。この辺にくると、もう両側の岩のたれ水等の湿つた辺にトゲオイトトンボが見られ出す。時たま、オオシオカラの姿も見られる。突然小生の目に鉄橋の上の高い木の間に、赤いシジミらしき姿がうつる。遠いながら良く見るに、花を好んでいるチョウの姿、大きさはウラギンシジミ位、確かに赤色である。小生の頭中にアカシジミの姿が浮ぶ、よもやと疑う間もなく、そう信じてしまつたほどにているのだ。他にも、1，2頭いる。運良く一頭近づいてきそうだ。サオの3本目をトロツコに置いてきたのを後悔するが、時すでに遅し。さいわいどうにか2本で届くと思つた瞬間、橋上にてネットを背伸びして振る、残念／は入つたはずなのに失敗、息つまる思いで附近を見廻すも、他の姿まで見られない。下は急流の谷川である。諦め切れず数十分休んで、ここでがんばれども駄目。心中は、数百m行つても治まらない、何かだまされた気持夢のようである。3頭も見たのだからまだいるだろうと気をよくして進む。小雨となり、手をちよつと出しにくくなる。ハンミョウが同情するかの様に、例の元気ブリのミチシルベをしてくれる。しかし時たまいや、ちよいちよい、はつと思い振り返らせることには弱つたものである。あまりにも色彩にめぐまれ過ぎ人を迷わすのだ。1Km位行つて、又例のアカシジミらしきものが姿を見せる、しかしついていないも又、にがしてしまう。それから数分の後これを見ていたTが、さつきのチョウを採つたといつて、ネットのまゝ持つてくる。胸さわぐ中にネットを手にとる。見てガツカリ、シヨンボリ、ベニイカリモンガなのだ。ハハハ・・・「バカだな，なんぼなんでも・・・そう云えばそういう気もないでもなかつた。これで一事件も解決したものの外の虫は・・・内(腹)の虫が納まらない。ハハハ・・・　しかし、この事件(?)以来返つてファイトのわいてきたことはうれしい。めいめい自分のペースで進む。並ぶ順序はその度変るが、K氏がほとんど先頭、小生できるだけゆつくりと心がける。ムラサキシジミ，トゲオイトはさらに多くなる。ヤンマの一種を遠くに見る。手がムズムズする。やつと採つたのがミルンヤンマ♂である。オニヤンマもあちこちにいる。途中製材所を通る。この辺にて夜間採集したらすごいだろうと望めぬことを望んでみる。職人用の宿の玄関の土カベや窓ガラス等に昨夜の残留組であろうガが昼寝でもしているのか、何か季節はずれの花か何かを連想させる。さらに進むと発電所の大型のセメント管が白く光つて美くしい。雑林の自然美の中に造型美を飾つている。近くの滝の状大さ、美くしさはバツクの緑にはえて何とも云えぬ美くしさで思わずシヤツターをおす。渓谷を羽ばたきしている大柄のミヤマカラスアゲハの姿も何とも云えない。イシガケチョウも独特の飛び方をしている。タタキアミも時々利用するのであるが、ヒメトラハナムグリ，ハナムグリ，ヨツスジハナ，フタオビミドリトラカミキリ，ハナノミの1種等に過ぎない。天候が悪過ぎるのだろう。何しろ網がタタキによつて、すごくぬれてしまう。小杉谷の附近2Km辺に来ると薄暗い中にミルンヤンマがあちこちにとびかつている。場所(足場)が悪くて2♂♂のみ採取。オニヤンマも同場所にみられる。トゲオイトの姿は相変らず見られる。出発より終点迄ハンミヨ

ウが多くいた。最後のゴールまでついてきた１頭は、おもしろくもつり橋まで渡つて行つた。つり橋を渡り、数十戸の村、ここが小杉谷である。ほとんど営林署関係の人家らしい。このつり橋を渡る時には足も大分疲れていた。ほつと一息つく目前にヤクスギがどつかり座つている。予定通り小学校に一教室を借りる。もう夕食予定の５時半であつたが、先生宅の親切で電気ガマにて、たいていただく。後仕末等はほとんど中学生２人ががんばつてくれる。雨は降つたり止んだりでどうも困つたことだ。校庭をミヤマカラスが横切つて行く、２人が追うがなかなか早い。少し薄暗くなつて、校庭をクロの方だろうコノマチヨウが横切る。Ｔがミルンヤンマの♀をとつてくる。一般にある程度の暗さを好む点カトリヤンマと性質がにていると思う。夜は今迄の採集物と雑談に花が咲く。２氏と共に童心に返つて子供心を楽しむ。床上に毛布一枚である。　大へん涼しい、適当に冷える。カーびきもいないようだ。この分だとこの辺一年中カヤはいらぬだろう。（後から聞いた話だが、全くその通りで　当直の先生は２年前来たまゝ、カヤは荷のまゝなおしてあるとのこと。たしかにそうだろう。）又、谷川利用の水力発電の豊富なためか、共同湯も電熱利用である。１１時になり、明日の採集予定物ミドリ等の夢、花江河のトンボ等をたぬき算しながら、他人の寝いびきの聞こえる中に静かにねむりに入る。雨の音は止えぬようだ。

７月２５日　雨　小杉谷～花江河まで行けず

起床せしは７時半。今日の予定は小杉谷より１６Kmトロ終点を至て花江河行である。出発する８時３０分頃はどうにか雨は止んでいるものの、はつきりしない。晴天までは望まぬとして雨にならぬことを祈りつゝトロ線に沿つて一行５人第１目標地１６Km地点めざして進む。途中イシガケチヨウが河原に多く見られる。ミヤマカラスもぽつぽつ多く見られはじめ、例の亜種に属すキマダラヒカゲも２Km地点から数頭見うける。たいして変りないが、少し小型の気らいがある。亜種といえば６Km地点でヤクシマジヤコウアゲハを採集する。斑も大きさが形やかである。アオバセセリのスピードの後には、例のスピードでものすごい雨に出合う。あのはげしい雨、ネツトどころか、身体までぐつしより、小生これを名付けて流れる屋久島の雨と称したい。いつものぐつしより濡れ、大分なれつこになり、さして何とも感じないようだ。この雨は、途中よりさらに強くなり、こうなると昆虫の方は姿は消すし、人間族はネツトフリどころか、いつの間にか形式的に物理的足の作用のみに終つている。甲虫屋もこうなるとさつぱり。これではいかんと、メガネにたたきつける、くもらす雨の中を側辺の材木に注意して行く中に、クロハナカミキリが顔を出す。附近のトロ道沿いの舎宅の奥さん連中が、もの珍しそうにながめている。（どんな気持で見ているのか？）この天候の場合、ちよつと小降りになつた間を天国と思つて有意義に使用せねばならぬ運命なのだ。途中、同情した小父さんが近道を教えてくれる。小谷川をチヨロチヨロ流れる辺に、雨にも負けずトゲオイトトンボの姿が３・３・５・５見られる。適当に手握みできる。ネツトは云うまでもなく振ることはcan-not。　中間辺で材木の裏で雨をしのんでいるセンノカミキリを採集する。今はキヨリ目標にはげまされてもつぱら着くことが問題になつてくる。後２Km地点に来た時には、足が１人で先に行く。どうにか瞬間的に雨は止む。後でかけ廻つていたＫ君が、ヤクシマジヤコウをニツコリ笑つて示す。この辺の名の知らぬ白い花には、相変らず

アオスジは多いとして、ヤクシマジャコウが見られる。ミヤマカラスも谷間のチョウ道を飛び廻つている。タタキアミするも例のハナムグリ，ハナノミ２，３種に終つてしまう。チョウの採集後、ネットからとり出すまでのgood tyming・スピードが問題となる。（∵リンプンが水ネットにくつついて鱗粉転写される）。乾いている絹ネットの、あの絹を裂くようないいネット音は皆経験するとして、水のしたたるwater -net の音も珍音である。又、すごい雨がくる。１６Km地点に着いた時には、トロッコ７，８両に大木を積んでいた。さすがに巨木がある。山と山とをロープでつなぎ、山から山の材木運送に使つている。花江河は近いつもりであつたが、まだ４Kmもある。今から登つて小杉谷への日帰りは少し難かしいという話。つれの２人の中学生のこと又、この雨中ではちよつと無理と行進断念。

断念すると人間の心はちよつとゆるんでしまう。杉の根下で雨やどりをしているが、ずぶ濡れのためガタガタ冷え込んできた。A氏は「遭難一歩手前の感じ」と連発。昼食を簡単にとり、附近の屋久島天然記念物のシャクナゲの自然体を見る。この附近よりあちこちにあるらしい。しかし長身的で葉がスベスベしている。相変らず雨は続いている。予定通り花江河までは行けず残念である。帰りは小杉谷まで機関車に乗せてもらう。やはり便利である。予定は明日下山、そして宮之浦に行くのだつたが。小生機関車の上で決心する後２日位１人残つて花江河，宮之浦方面の採集を試みることを・・・朝比奈先生の言葉にもすまなく思つて・・・。夕方少し雨もおさまり、遅い夕食をガメツクいただく、なかなかいける。夜も８時を過ぎる頃には、運良くも星がまたたいてくれる。明日に期待をかけ、多くの希望に燃えて目をとじるは１０時。

７月２６日　　曇　　小杉谷～花江河

気持よく目を醒ます。他の３人はまだグウグウやつている。目は外へ走る。どうにか少しの３，４の雲はあるが晴天といえる、有がたや有がたや。早く登る予定だつたが、８時頃トロッコが登るとかで、それに便乗さしてもらうことにしてゆつくりする。彼等４人は予定通り８時のトロで下山する。小生は唯１人花江河一泊をめざして進むのだ。トロ発点に行つて待つていると、同胸植物採集の連中数人が来る。後からいさまし出立ちの２人の昆虫採集家がやつてきた。相互に会釈する。彼等２人も上に行く気配。どちらからとなく一見して気の通ずるのが同属のいいところ「獲物はいかがですか？！」となり、話もとけ込む。相手の「カバマダラを安房で・・・」に、ハツと思う。こちらからきく前に親切にもいろいろと採集地を説明して下さる。安房営林所事務所裏の海岸の辺で、２人で１０頭位採集されたという、他はめぼしいものはないらしい。カミキリを楽しみにきいてみるに、ビロウドカミキリが毒管に眠つているのみ。延岡からおいでとのことだ。服装用具が理想的ですばらしい。道具も苦心してある。ほとんど自製とのこと。間もなくトロ参上。労働者（キコリ）の出勤用らしく一杯。他にそれらの関係者の子供達３人を乗せて、「この通り一ぱいなので、一般登山者は歩いてください。」とのことだ、もう１人ならいいというが、皆、集団組らしい。小生も一担は一歩出ようとしたが今知り会つた同胸２人がいるだけに１人だけはいかぬ。結局リュックだけたのんで、採集しながら進むことにする。皆、便乗さしてくれるとのことで待つていたのに「こんなことなら早朝出発するんだつたのに」と、愚知をこぼ

していた。実際小生だつて便乗を期待して待つていたのだ。天候も良候、3人で語らいつゝ採集して行くのだ。昨日歩いたコースだけにちと楽しみは消えるが、やはり気持がよい。昨日と同じ所にイシガケが見える。ヤクルリが小杉谷附近に我が者顔に飛んでいる。霧島山産とすると、黒スジがはつきりしている。タタキもたいして変化ない。もつばらさつきの話の続き、皆ヤクシマミドリに期待のあるのは同じらしい。七つ道具の準備良さには、感心する。話によると2人は延岡の市役所のS氏と、旭化成のA氏である。2人ともチョウを主とし、甲虫，カメムシ，ガと範囲が広い。2人仲良しであちこち廻つているとのことで、標本もかなり保持されているらしい。もつばら同友との会話でスムースに進み16Km迄はものすごいスピードで行く。同趣味の友と会えたことはこの上ない喜こびである。「旅は道ずれ世は・・・」とやら。16Km地点寸前に小生のリユツクがおろしてある、2人は花江河まで行つて日帰りで、小杉谷泊りとのことで先へ進んでもらう。小生は花江河一泊の予定であるし又、リユツクも持つて行かねばならぬのだ。朝食もまだ取つていなかつたので、営林所関係者のお茶をもらいハンゴウメシを食す。その間2人には先に行つてもらう。そこで20，30分過して、リユツクを背おつてテクテク自分のテンポで一人進む。今迄の手ぶらとは勝手が違う。トロ終点16Kmより山道へは入る辺に来ると、いよいよ雲行がどうもこのましくなくなる。あれほどの上天気だつたのに・・・ちよつと不安になりながらも山道には入る。300m位は切り倒された屋久杉等のため道は中断され、あつち行きこつち行きの、じぐざく進行、背にはリユツクがあるし4，5m進むにも大へん。木の下をくぐろうとするもリユツクが後から枝に引つばられ進行をくい止める。この湿つた（下に谷川がある。）木々の間を、ミルンヤンマ，オニヤンマが同じコースを（トンボ道と名づけていいのだろうか）くり返し飛んでいる。この附近を通過するのに小生以上の荷物をせおつた登山者諸氏の苦労も大へんだろうと人事を心配する。このじぐざく進行に一息入れるため、ちよろちよろ水の流れる近くに尻をおろす。谷間を伝つて下の方からコツコツと聞えてくる音。“山深き　谷間にひびくあの音は、屋久杉の枝はらうオノの音かな”いらぬ時間をここで取り、どうにか迷道から抜け切つて冷え冷えする中を上下，左右に注意して進む。この辺ヤクシマミドリのいそうな所、しかし間もなく雨がおそつてくる。リユツクの重さは行動を（一）にする。確かに九州一の登山コースとあつて傾斜も急であり冷えびえさも強い。周囲は薄暗く雨は降り、獲物は何も見あたらない。この辺にくると唯トゲオイトが群れているのみ。霧もうすく張る。小谷を何回もくり返し進む。数Kmごとにある道標がせめてのもの慰めである。この辺迄に見られたのは、キマダラヒカゲ，トゲオイト，オニヤンマ等である。採集はちよつとストツプだ。一息と思い座り込んでいると、体がしびれてきて、うとうとする。ハツとして立ち上る、これぞまさしく遭難一歩前と思う。数回の休息の後、標識のKmの残少に元気づけられてやつと着いた所が、石造の一山小屋の立つ花江河。2氏はすでに着いている「ごくろうさん」一言でついた喜こびにひたる。「どうでしたか？」「いや、ミドリどころじやありませんでした」。お互に悲しい言葉のやりとりである。「ここでもたいした記録はありません。今夜ここにお泊りですか、下山されますか？」との問。小生「一泊して附近をさがしてみます。」と答える。しかしこの辺ではちと希望もと直感する。両氏の下山さ

れるとかで、改めて屋久島では再会を望めないので、名刺の交換、今後の交友を誓いつゝさようなら。1人残された気持でしばらくシンとしていたが、山小屋の中に入ると先客があるらしい、荷物リュック3つ。途中よりこの辺には、霧島山でよく見られた白(シロヒトリガ)が多い。しばらくして帰つてきた3人、高校生2人と中学生だ。すぐ仲良しになり今夜の宿を共にすることを共に喜ぶ。中に入るがガツカリ、小屋の中は湿り一ぱい。板二枚の上に4人寝るのである。営林署関係の生徒達である。さつそく1人で附近を廻る。小屋より50mも隔たぬ所にそれこそ美くしい湿田、自然の水前寺公園とも云えよう。花江河、実に美しく自然美とはいえ、人工の手が加わつている気がする。朝比奈先生、トンボと頭の中は一ぱい。目をひからすが、シーンとして獲物らしいものは何も目につかない。入口でトゲオイトトンボを採集する。少し雨の止んだ間を高く永田岳の方へ、ヤンマがとんでいく、種ははつきりしない。湿地なるほど草原(小型)、時たま水たまりがあり、小溝がそれに沿つてジグザグに流れている。割とめり込む所もある。中央にシヤクナゲの大株が、どつかりと座つている。この辺のものは、大分ズツシリとしてきて葉もスベスベでなく葉裏には白い綿毛が長くはえている。その湿草原に何か落ちた。急行するにオオセンチコガネのルリ色の光沢が彩やかだ。沈んだ小生を元気づける。やはり1600mともなると気分もズーツとする。おまけに雨ときている。ツマグロヒヨウモンがあちこちに飛んでは落ち、とんではおちして産卵しているらしい。小型のスミレがなるほど多い。終令幼虫が水たまりの近くをすごい速さではつている姿にはびつくりさせられた。山手の方へ向つている。目前を光る緑色、さてはセンチコガネとネットを振る、運良くは入る。色に魅力を感ずる。2,3回周つて細かく調べていくが、タマリの辺にもトンボの姿は見られない。ちよつとの日照を利用して付近の写真をとつておく。宮之浦岳まで4Kmとの標識が立つている。あいにく雨が降り出して宮之浦岳登頂は途中で断念。この寒さでは夜が心配となり雨を利用して一休みする。1時間位寝むつたろうか、日は斜いていて、どうにか太陽の光が入つてきている。しめしめと又、例の湿地へこの付近にもシヤクナゲの木が多い。柔い美しい新芽がつぼみを装つている。湿地帯に出るや否や、1頭のヤンマが目の前をフラフラ飛んでいる。ネットを振ろうとするも、近くの小木に静止、しめたとばかり一振り、やはりオニヤンマだ。この付近に何か出そうなのに・・・。しかし水は涼んで大分冷い。残念にも花江河1.5Km前で、ここのために用意してきた水中温度計も壊してしまつて、水温は測れなかつたものの、冷たい、これで何と何が発生できるかな?と、素人思いする。幼虫も準備不足のため駄目。もう、時計は、5時半を回つている。付近には、今もなおツマグロヒヨウモンが産卵に余念がない。又、時々、キマダラヒカゲの獲物が湿地帯を横切ろうとする。それを採る。夕食はハンゴウメシを軽くやる。出ていた3人は、薄暗くなつて帰つてきた。石油を利用しての遅い夕飯を作つていた。4人雑談にふけりつゝも、除々に各々ねむりについて行く。冷える中に時々目を覚まし、昼寝の逆効果を恨む。スツクと、真夜中2時、1人山小屋を出る。外気の寒々さがピリツと肌をさする。その快快さは又格別である。黒と藍の空の色の美くしさ、星に少しでも近づけた気持か、山で見る星空の美しいさ。星の色に1人ひたるのであつた。明日いや今日の天気は大丈夫だ。

7月27日　快晴　花江河～安房～宮之浦

目を覚ましたのは6時、3人の寝姿は体をできる限りに縮めて夜明の寒さを想像させる。山の朝は又美しい。久しぶりの晴天に恵まれていい門出だ。朝食を簡単に済ませて、付近の最後の調査、空の青さも今日はさらに美しい。もう1日がんばりたいながら、宮之浦には同胞や次の計画が待つている。トロ終点16Kmから機動車が出るので、同乗しようとの生徒達の話で、準備して、未練を残しつゝ3人と共に花江河出発。付近には、クロウリハムシ、テントウに目がふれ、少し下にミルンヤンマがいた。つれのあるためスゴイスピードである。こちらはしんがりをつとめつゝ、採集していくが、たいしたものはない。急ぐ顔にトゲオイトが触れる。昨日の苦労して登つた同コースなのに、あつという間にトロ終点にきた気がする。到着は8時ちよつと過ぎ。まことに早かつた。ヤクシマミドリもとうとう諦めになつてしまうかな。何といつても、食草アカガシが伐採されてほとんど姿さえ見られないのだ。この付近には、オニヤンマ，ミルンヤンマが多く、木々の開けた所を行つたり来たりしている。予定通り機関車に横乗りして、早い小杉谷行となる。途中、車上より多くのチョウ，トンボ，甲虫類のとびかいを見る。こうなると歩けば良かつたなどと、欲ばりする。先の予定を考えると、この方法が最もいいのだ。今日の予定が、宮之浦まで帰らねばならぬのだ。車上からの谷間を見おろす快快さ、急カーブ等、ズーツとすること多々。新鮮なミヤマカラスを車上よりうまい net-in 。しばらく行つて、カミキリのラミーの濃い色をした奴、判断できなかつたが、残念、アツという間の出きごとで失敗。しかし体ともカミキリにとられるところだつた。さて何であつたことやら、何しろ昆虫の展開もなかなか早い。朝風を切つて進むさわやかさの吾が鼻の辺がむずかゆい、何かと思い手をやつてみれば、トゲオイトのいじわる。今は愛稿ものの友である。10時頃小杉谷到着、辺でヤクルリ，キマダラヒカゲ，イシガケ，ミヤマカラス等を採取して、早い昼食をする。リュツクは後便のトロにたのんで、先に採集しながら安房へ進む。七つ道具とカメラ，パン2つで足どり軽く・・・。

最後につり橋をふり返り、別れを惜しむ。来る時のミルンヤンマの多く見られた所は、今は日光が照り過ぎてか全然駄目だ。イシガケチョウが多い。冷水に来ていたミヤマカラス，アオスジがあわてて飛んで行く。トロできたえた機敏さかなOr採集家の前科物かと、後姿を1人眺む。トロ線に沿つた種はやや敏感な気がする。ヤクルリ，アマミウラナミ，時たま、チヤバネセセリが飛び出す。2Km地点でヒメイシガケチョウ（?!）をとる。すごく小さい。これほどの小型は、飼育の栄養失調でも出したことはない。体長13mm。もちろん、イシガケについては、一般に小型がめだつた。又この辺にはめだつてトゲオイトが多い。ヤゴの採集はあつたときくが、一応この生態の一面でもと、座り込みの調査を始める。トロツコ線路に沿つた岩を伝つて水の流れ落ちるその脇の辺、水のしみ伝つている辺に多い。20分後のこと突然小溝から谷川へ落ち込む石垣コケの上で、一頭の♀が盛んに尾を曲げている。産卵の動作である。さてはと思い、あわててカメラを近づける。「シマツタ」近づき過ぎたらしい。姿はしぶきではつきりせぬ、上昇したらしい。残念なことに接写リングをリュツクにおいてきたのは手落ちであつたが、ここで1つ産卵状態を観察することにしよう。とのことで、2時間の肝だめし、座り込みとなつた次第。附近20m

辺を行つたり来たりするがなかなか見られない、駄目だ。交尾状態の奴まで失敗。
3回目にさつきの場所にくる。おや、いるいる全く前の場所に、心はずむ。じわじわと接近。
50m位に近づいている。リングナシの普通撮影。先ず普通の如く適当な場所を選んでいる。石垣にはえているコケの一種に手足をよくかけて、羽を十分開きの状態で、尾をゆつくり1／3円型に曲げる。コケの表面を尾端が触れるように走る。この上に産むかと好奇心にかられる。いや上ではない。そのコケとコケの間の柔い所、すきまに尾端を4.5mmは、入れただろう。適当に尾端は移動してくり返される。だめだと直感するとすぐ尾端の位置を変え、いい場所に入れて行く。時たま、こいつのこの尾でと思える固そうなコケの葉間を、開けて入れることもある。6，7回やつたであろうか、おもしろいことに、頭部はそのまゝで、尾端の移動で急な半楕円形になつたり、半円形になつたりして無理な型を作る。ふと気づくと、小生の顔は熱中して、それの20cm付近に接近している。こうなると簡単に逃げぬらしい。と思う間もなく、ちよつと20，30cm横に移動する。ここは上からの小谷川のささやかなしぶきを受ける所にあたり、母体の翅には小粒の水玉が出きている。そこでも、同じ動作を試みるが、尾端が気にくわぬらしく、10cm位ずつ小さく移動して、又前の場所にきて、2，3回試みた。念のため手先を少し近づけて少し移動させてみたが、産卵はもちろん、又、そこへもどろうとしなかつた。結局3角紙入り。この場所は、地面と直角に交わつていて、普通通り、上向きの姿勢で、水の十分しみ込んだ、かすかに水のしぶきのかかる所であつた。それから、その産卵地のコケをもぎ取り、これ又、3角紙に包んでもち帰ることにする。時計を見るに2時間余を過している。交尾の撮影も余り接近し過ぎて、離してしまう。くり返しポーズをとつてくれぬのが自然物の難かしさである。時間をくつて、少し急ぐ。サツマシジミの新鮮な姿がなつかしい。イシガケ，ムラサキツバメ，クロアゲハ，アマミウラナミ，オオシオカラ，オニヤンマ，トゲオイト，シモフリコメツキ，ハナムグリ，ヒメトラハナムグリ，フタオビミドリカミキリと普通種にすぎない。たいして変化のない類に目を配りつゝ中間地点の製材所にやつてくる。行きと同様、3・3・5・5の蛾がガラス窓にへばりつき、夜の到来を・出番を待つているようだ。間もなく、機動車が追いつく、約束通り乗せてもらう。
リュックは都合により、後便でくるという。いよいよ最後かと、運転台より風景に心を楽しむ。上から下へと亜寒帯植物より、亜熱帯植物へと広い分布を示すこの山は、下の地点では、木生ヘゴの自然木が珍らしい。オオタニワタリも腐れ木のフシ・大木の上等に見られる。運転士と気が合つて途中にいろいろと話す。急谷辺の急カーブでは、ケーブルカー気分も味える。後3Km位の辺だつたろうか、昨日ついた肥後，橋元の両君が武装してやつて来おる。「ヤア」運転士さん気をきかしてしばらく止めて下さる。今迄のいきさつをざつと説明、彼等もカバマダラの話を出す。小学校の校庭という。大部発生しているらしいな。ミドリシツカリ，トンボたのむ。橋元君曰く「もう1回登ろうや！」、行きたいのは山々、しかし明日には明日の川々が待つている。2人はいい初日を迎えた。その間30秒余。2人の成功を祈りつゝ安房へ。トロ出発点0Kmに到着していよいよカバマダラの採集だ、と希望に燃えて営林署貯木場へ行く。1時間余捜すが、全然姿すら見られない。ツマベニが彩やかに綱バリとばかり飛び廻つている。4日ぶりの姿でなつかしい。

安房川を悠々と横断している。日はカンカンと照つている。目前を飛んでいる甲虫をすばやくネットへ。アヤムネスジタマである。枇榔島で7，8頭の経験はあつたが、屋久島では小生としては初の記録である。付近のタタキでウバタマコメツキを得る。さつそく営林署事務所裏へ急ぐ。海岸線に沿つて裏表と調査してみるが、ピンとこない。この辺にいるのかな。「オヤツ！アレダ！」と思いかけつけてみると、何だツマグロヒヨウモンの♀である。小生、今だカバマダラの採集の経験がなく遠方からは区別つきかねるのだ。ツマグロならいくらでもいる。どうも邪魔になる。1.5時間余捜して後、クサギ上の新鮮なツマベニを暇つぶしにとる。熊本県産と称する採集家が、ここでがんばつている。どうもあきらめきれず、付近を一周して、もとの場につくと、向うから手を振る人がいる。たしかに見た様な人、それもそのはず、昨日の延岡の両氏である。ここで再会できるとは思わなかつた。その後又、数頭とれたとのこと。「前より少いですよ。」との話。採集地はやはりこの付近を中心に、町中でも取れ、又、川向うのさっき捜した貯木場の海岸辺で交尾中のものを採集されたとか。クロタマがドク管に見える。一諸に一周してみようということで、出発するや否や、ちよつと先で「成見さん、いましたよ！」と、いう声、急足で行つてみると、もうネットの中にいる。「どうも私は、ついていないのですね。」とつぶやくと、B氏は同情してか心良くあげるといわれる。遠慮なくいただく。初めて手にとるカバマダラの優美さ。又、30分後同コースを歩くが駄目。明日又来ることにして調査うち切る。3人してムシヨモヤバナシ、同好会の話がちよつと出てきて、T氏は吾同好会に入会さしてくれといわれ、XYZ円を預かる。会員の採集地での増えたことは、この上ない喜こびである。明日の快速船で帰られるという。又，又の再会を楽しみにさようなら。5時、トロ出発点に行き、リユツクをとる。貯木場の材木より、多くのヨスジトラカミキリを採る。バス5時半ギリギリまで採集を試み、1頭のカバマダラも与えられず、明日に楽しみを残して宮之浦へ。K先生宅へ到着するやホツトする。皆、帰りを待つていてくださり、今夜のため、一日ウナギ取りがあつたらしい。ウナギノカバヤキにビールの味もいい、ウナギメシもいける。先生達のめいめいの自満話（ウナギツリ）をききつおいしくいただく。このトランジスターでスタイルのいいのは、X先生の苦心の半日がかりの1ビキらしい。この雰囲気で疲れもふつとんで行くので不思議。弟等の話、あれほどさがしていなかつたのに、タテハモドキの集団発生地を見つけたそうだ。めいめい20頭前後採集している。新鮮なもの傷あるもの様々である。ウスイロコノマチヨウも3頭取つている。タテハモドキは高校の近くの湿田が採集地という。イワダレソウか、スズメノエンドウか。楽しみはふえる。E先生とK君は明日の便で帰る予定で、小生と孝信（弟）は、安房のカバマダラの食草その他の調査や、又、尾之間，湯泊と一周調査する予定で、安房への出発となる。互に送別会となつたのだ。

7月28日　晴一時俄雨　宮之浦～安房～栗生

E先生等2人は、今日の快速舟で帰る。我々弟孝信と2人は安房～栗生の方へ3日間の予定で周るのだ。こちらが先に出発で、バスを皆見送つてくれる。K先生宅にも、又お世話になるかもと冗談混りの別れを告げる。「帰りには又必ず寄つて下さい。」とうれしい言葉をいただく。真にいろいろとお世話になつた。安房に着いたのは午前の10時、2時間余例のカバマダラ調査、営林署の付近である。初とあつて孝信の目の輝きが違う。昨日と同様ツマグロヒョウモン♀に驚ろかされる。浜砂にはつている小型スミレに産卵に来ている。数mに近づいても一生懸命に産卵している姿を見ると、ついみとれてネットを振る気になれない。暑さと乾燥のためか砂上に、1終令の死がいがある。終令にまで来てかわいそうにと思う。そこよりちょつと離れた食草の間を、炎天下の砂上を小走りにかけている3令さんの姿がおかしい。・・・30分位たつたろうか2周して来たTが「いたいた、これじやつどがな！」と云つて走つてくる。ネットの中に、はつきり見えるカバマダラの姿、新鮮だ。ヒラツと山上（木）より、舞い下りてきたところを採つたという。これに元気を得て捜す。海岸にてジャンプしての1♂を採取する。3頭目の成体を変な姿にて採取する。チョウではめつたに見られない。いや小生としては今だ経験した記憶のない電線静止である。はじめ、枯木の頂上で、トンボの如く止まり羽ばたいている。それはあたかもヤゴのクイ上にはい上り、羽化直後の姿を思わせる　姿の中を見つける。ネットを近づけたところ、ゆるやかに小ヤブを越えて、営林署側に飛んでいつた。急いで裏に廻ると姿は見えない。それもそのはず、捜す場所が違う。目前の電線上に止まつているのだ。あたかも電線に産卵するか電線に喰い入るようなカツコウでクルクル廻つている。トンボ式で採集する。♂だから又妙。珍しく思つた。時間を気にして荷物とりに行く途中、町中で舞つている♀をとる。計2♂♂2♀♀を採集してK先生の奥さん手作りの昼食をとる。12時半の栗生行のバスに乗り込む。採集しながら歩いてとも考えたのであるが、もし天候の都合で先へ進まれんという最悪の場合を考えて、栗生まで直通して、歩きながらこちらへこよう、と考えたのだ。さすがは南国へ近づくとあつて、窓外の風景も変つてくる。バナナもめだつて増えてくるし、暑さも時間の関係もあるが、ムツトしてくる。炎天下における昆虫の特にチョウの種類の多く見られぬのは寂しいが、ギョボクに沿つてツマベニがあちこちに見られる。暑過ぎるためか、力だめしのためか、オニヤンマが、車に沿つて小生の顔に接せんばかりに、とぶ姿はおもしろい。羽の振動が激しい。ちょつと頭を出そうとしたら駄目。落悟しておいて行かれる。ガジユマルの木の奇根の気根に驚ろきながら車は走る。谷川の近くにあるこの姿はまさに南国を思わせる。湯泊の辺でカバマダラらしい個体を見る。確かにそうだつたろう。帰りに期待をかけつゝ、今はただながめるにとどめねば仕方ない。栗生に近くにつれて、アゲハに比べてキアゲハの個体が非常に増えてきた。“アゲハの多い所にキアゲハ少し、その逆も又・・・。“（何かで幼き時代読んだ記憶がある。）のチョウ式の通用する一例であろう。黄色がさらにカツ色に日焼けした様でさすが南国のキアゲハを思わせる。タテハモドキは、この辺で初めて目撃する。キチョウはあちこちに、モンシロは、あまり見ない。ツマグロヒとカバマダラの違いは遠くからでも良くわかり出した。ハマゴボウには、ハナムグリが少し、

ハナアブ，ハチ類が群がつている。バスに揺いてモンキアゲハが空高く上昇して行く。空の青・海の濃青と気持良い色だ。この辺にくると海の青さが増してきて、むしろ濃いコバルトに近くなる。その岩に打ちつける白波の返りが、海，空の青さに比して印象的だ。ウラナミシジミ，アマミウラナミシジミがかすかに区別つく間隔の所に見られる。そのうちにある程度の家々の見られる一部落に到着、車掌の合図で終点、栗生と知る。根拠地として、特別当てもないので、近くの栗生中学校に相談に行く。実験園と書かれた美しい花々に囲まれた小じんまりとした、美しい学校である。これが栗生中学における私の第１印象だ。その周りを松林で囲まれ、裏浜より、サザ波の音が聞えて来る。運良く、校長先生もおいでで気持良く歓迎して、泊めて下さることのこと。汗ばんだ顔、手足等を清水で流し、附近を一周する。バス終点を通過して、はずれに栗生小学校がある。校庭にはナガサキ，クロ、　アゲハ，モンキ，アオスジ等のアゲハ類が見られる。チャバネセセリ，ヤマトシジミは校庭を往来している。バス停留所の所に、校庭から特徴ある飛び方をする一チョウに目がつく、カバマダラに違いない、急いで近づくが、すでに河の上で雄々と廻つている。この点、ツマグロヒヨウモンとの区別点に普通の状態では、南国的、フワフワしたアサギマダラ的飛び方をしていることだ。そのまゝ、人家の屋根を越えて姿を消してしまつた。まだ見られるだろうと思つていたが残念ながら結局栗生ではこれが最後の１頭になつてしまつた。栗生迄発生しているのかな。近くには、ヤマトシジミ，ウラナミシジミ，ムラサキシジミ等が見られる。チャバネセセリは多い。栗生中学校入口に、簡単な貯木場があり、材木に注意するとヨスジカミキリが見られる。５，６頭毒管に入れる。松林を飛んでいて、タタキオトサレタ不運のクロタマムシ，ニジゴミムシダマシの先客あり。校庭にはハンミョウが見られ、校庭を囲む松林よりアブラゼミ、近くの小木よりニイニイゼミのカスカニヒビク声が、波音に混声（？）しておもしろい音楽を奏でてそる。宿直室に案内され、校長先生、当直の先生、他２先生といろいろと話している中に、「当校の理科研究としてアカウミガメの生態研究中だ」と聞いて関心をそそり、くわしく聞くと理科室に案内される。２０個余の小広口ビンに、産卵後、１２，３日までの毎日のカメ卵の中味が液づけしてある。完成すると初の発生過程の研究となるとか。いろいろと見入つていると、研究担当者の生徒を呼んで今日の分を、卵割から標本作りまでを見せていただく。卵割と同時に淡灰色の甲らしい型をつけた粘膜と血管に包まれた仔ガメが出てくる。じつにかわいい。それを数秒の息をする間なく、ホルマリン・アルコールの中へ落すから哀れ、しかし研究という目的のためには幸運な奴と取るべきであろう。自分も虫を採る時には常にその気持でいる。話を聞いて知つたのだが、記録映画“エラブの海”のあのクライマックス，アカガメの卵産シーンは、今サザ波の聞えてくるこの学校裏の海岸でのロケだつたのだそうだ。唯、「へー」とつぶやくばかり。あの映画のシーンが、目前に再現されるようだ。珍らしい見学ができた。当研究の成功を祈りたい。尚、理科室の片隅にある古箱の中に標本箱３コを見つける。生徒の作品とあつて、１０ぴき位ずつ入つたチョウの標本のみ。さすがは南国に位置するとあつてか、リユウキユウムラサキ（１♂）・メスアカムラサキ（♂♂４）・ツマベニ・ナガサキアゲハ・キアゲハ（２♂♂１♀）キチョウ等が主である。一箱は、１０ぴきしかは入つていないのに、リユウキユウム

ラサキ（１♂）（フイリピン型），メスアカムラサキ（３♂）が含まれるところから、この辺には相当に多く見られたことが予想される。これはラベルがなく残念であつたが、先生の好意で採集者を呼んでもらつた。話によると、「昨年の夏休み直前で、学校付近にいたものを手あたりしだいに取つたもの」という。話から７月の１０日～２０日には間違いなさそうだ。夕飯は、花江河より直通で下りてきたという、宮之浦小の先生達４人との共同炊事で話がはずむ。近くにテントを張つておられるとか・・・。夜は宿直室に担当の先生と３人宿る。電燈に集る昆虫も普通種のみである。話はもつぱらこの付近の話のことで、ほとんどが半農半漁の生活者であるとか。再びカメの話で、昔からこの裏の浜には多くの産卵ガメが上がつて多くの卵を残していたが、最近は卵等の取り過ぎのためか、上がるカメの数も又、卵の数もずつと減つてきたそうだ。今夜辺出るんではないですかね。の話に胸がさわぐ。床について、もう一度“エラブの海”の再写に楽しむ私である。１２時を少し過ぎているもうぼつぼつはい上つてくるのでは・・・なんて夢想にふけりながら、波の音も自然に消えていく・・・。

７月２９日　　晴れたり曇つたり一時俄雨　　栗生～尾ノ間

６時半いい心地の中に目覚める。校庭を散歩するすがすがしさ。採集も今日のコースが南国屋久島でも最南国地帯に当たるコースとあつて希望に燃えている。尾之間迄の採集予定なのだ。出発に先出ち、理科室の標本に改めて目を通す。前述の３箱の中の合計頭数がアゲハ（１），キアゲハ（４）であるが、小生の見当からもこの比が栗生附近においては成立つと思う。荷物をどうして尾之間へ運ぼうか。苦心していると、ちようど役場の自動車が、小児マヒワクチン接種のため当校に来ているので、校長先生のはからいで、午后４時頃尾之間迄届けてもらうことになる。いろいろと感謝の気持一杯で一路尾之間へ出発。９時１０分前である。さあがんばるぞと元気百倍にして校門を出る。昨日のヨスジカミキリの材木に注意しても、まだ早いのか何の姿も見えぬ。キアゲハの濃い黄カツ色の新鮮な♂が早速ネットに入る。あまり元気がよ過ぎ足どり軽くて、テンポが早まる。これではいかんと、速度をゆるめて周囲に注意。栗生から５００～６００ｍの辺で路上に静翅しているタテハモドキ♀を採取する。割と傷はついているが、小生としては屋久島では初記録だ。ハマゴボウには、ハナムグリ，ハナハブの類が遊んでいる。キアゲハが低く、ツマベニが時たま高く見える。キチョウ等に注意して進む中に尾之間との中間辺湯泊に到着。この付近の花園あるある２，３本ではあるがトウワタが咲いている。カバマダラがか弱い風雅な姿をみせびらかすように近ずいてくる。ネットに入れて後２０～３０分ここでがんばる。花園のトウワタを中心に２♂♂２♀♀の記録を得る。１頭は百日草の花上、ケイトウ上で採る。近くに、ツマグロヒヨウモンの見られるのはおもしろい。ここにあるガジユマルのすばらしさ。絵ハガキに見る根間を通過する自動車の絵はこれであろう。気根のおもしろさと共に下を流れる谷川の水の清涼さ、それの脇水に吸水に来ているアオスジ，アゲハ，クロ十数頭に混つて一きわドツカリと落付ているのはミヤマカラスである。ミヤマのネツトインと同時に、ガジユマルの木影にカバマダラ出現。孝信追つかける。そうこうしている中、ちよいちよいあることながら、後を見ると子供達が５，６人ついてきている。ネツトを振る度に（うまいな、逃がした、ヘタダナ）にはどう

も困る。中に外人の子供2人に気づく、その内主人らしき米人が来て英語入片言日本語で話かけてくる。自己紹介して自分の屋久島についての意見をのべている。ここにきて1年たらずの宣教師という。一見して学生ととつたらしく、日本式英語の話合となる。さかんに採つたチョウをどうするかと聞く。‥‥for studyとくわしく説明らしからぬ説明をする。どんな質問が後に続くかと、心配しながら慎重に‥‥。しかし、5，6才であろう金髪の娘の手にクマゼミがは入つているのを見てホツト一息。近くだから自家に遊びに行こうと推める。予定があるのでとやつと断る。一冊の小子をもらい、先を続ける。コースが海岸線で単調過ぎるので、ここから少し一段高い細道には入る。数秒して5，6m先を淡黄色の大型のシロチョウ、やあ「‥‥ウスキチョウだ！」という間もなく、かまわず飛んで行く、何故だつたか自分をせめるが仕方ない。
余りにもアイウチであつた。孝信は盛んに追いかけているが、駄目々。小さくなるまで見えていたが、畑のはるか彼方に消えて行つた。あー、これこそ一瞬のできごとであつた。あゝ、Catopshilia！、しばらくは「ボアーン」としている。過ぎたことには‥‥で今後に希望をかける。クサギの花にはたいてい必ずといつていいほど、ツマベニがおり、アゲハ，モンキ，クロのアゲハ類や、ツマグロヒョウモン，又シオカラトンボ，ウスバキトンボが多い。しばらくはシロチョウに目が光る。しばらく行くと、又海岸沿の大通りに出る。Catopshilia のことで頭中1ぱいでキチョウ，ツマベニまで目がくらむ。途中の一軒茶屋で遅い昼食をとる。間もなく平内だ。人家と共に期待のカバマダラここにも見られる。トウワタに止まつている奴、道路上に飛んで来ている奴、3頭見る。タテハモドキも町中に出ている。その一部落を通り過ぎると、両脇の田に、イネの上をゆつくりと飛んでいるタテハモドキが見られる。5頭記録。甲虫では勢い良く飛んでいるアヤムネスジタマ，クロタマムシ，ナミタマムシのタマムシ類が得られる。アブラゼミを最盛期に早いツクツクボウシ，遅いニイニイゼミの声が同時に聞けてたのもしい。町中（小島）で元気をつけて、尾之間へ。この辺の水田には、シオカラ，オオシオカラ，ショウジョウトンボ，ウスバキトンボ，等が多く見られ、又2頭のギンヤンマを採取する。殊にカツ色モヨウの増しているのは気のせいであろうか。近くの温泉のためか、ハラボソトンボも見られる。谷川の木影に黒い姿、アオハダトンボと見るのが欲で、やはりハグロトンボである。海岸沿にはアマミウラナミ，ウラナミのシジミが多い。しばらく行くと、切出した材木の集合所に出くわし、よく調べてみると、クロタマムシ（4），ヨツスジカミキリ，フタオビミドリカミキリが多く見られる。待つていると、どんどん飛んでくるからおもしろい。何といつてもヨツスジがだん然多い。近くでアヤムネスジタマを取る。尾之間到着は、4時過ぎであつた。公民館に宿すつもりだつたが、役場の人達の親切で、宿直室に泊めてもらうことになる。疲れている体に、お茶だ何だと親切が身にしみる。石油コンロで夕食も準備して下さる。近くの温泉に案内され、疲れを落とす。イオウ分等が含まれているとかでヌルヌルしていたが、やはり温泉での気持はよい。タオルを肩にかけ、幸福感、旅の親切感を楽しみながら、大空の星にながめ満たるのはよし。しかし不安は、ラジオから流れくる台風10号の発生、屋久島接近の恐れも？の予告である。宿直室には、2人の当直の人、近所の1人、我々2人、5人でラジオを囲んでいる。台風来島は例のことらし

い。舟は少し遅れるだろうとの話だ。湯上りの茶に、原産の黒ザトウを出してもらう。どうぞと推められ大片をさし出される。上等過ぎるのか、甘過ぎるせいか、苦い気がした。不安の中にも、宿直の人との尾之間付近の話にふける。途中で見た、パイナップル園のこと、目前にあるパパイヤ，バナナに多くの種類があること、製糖工場のこと、又、花江河登山中に、サルやシカを見なかつたかのこと、たいてい花江河付近で見られるのらしい。たが、一回もその機会を得なかつた。当人は、佐多に、前居たとかで、昆虫に少し興味があるらしい。天気さえよければ、明日は同行されてくれとのことだ。うれしい言葉だ。それから、この辺は電波のすごくキャッチし難いということ。トランジスターラジオの音も悪いし、又時々、電球（６０Ｗ）の光・豆電球にまで変わる弱さには驚く。部落単位で発電しているそうだ。屋久島は水力発電力旺盛で‥‥なんて考えていたが、場所によつてこんなに異るものなのか。風，波音が聞えてくる。ラジオはくり返し、台風について告げている。心のパットしない夜だ。

７月３０日　曇り時々俄雨（風）　尾ノ間から安房へ

葉の音に目を覚ます。そう強くはないが付近のバナナの葉らしい。大分、接近してきたかな？小雨混りの風である。自分もそうすべきと感じたし、役場の人々の推めもあつて、今日は採集しつゝ行きたいながらも、バスとする。最後１０分間を利用して、付近の散歩、ツマベニがパパイヤの木影を抜つて飛んでいる。バナナも自然美あふれんばかりに大きな房をたれ下げている。風にその房がカスカニゆれている。役場の人々の親切にお礼して、バスは安房へ。途中、役場で聞いた製糖工場が見える。昨夜の黒ザトウここでできたのだ。前述の如く、普通のより少し苦い感じがしたが、味は本場でいいのだと役場の人は云つていた。純粋の味なのだろうか。記憶新しいバナナ，単冠，小笠原‥‥が車窓を流れていく。はげしい雨となり、外の景色も雨粒と化し、かすんでいる。海には早い台風の予波（？）、白波が立つている。１時間位して、つり橋の安房。ホッと一息して安息地を求める。今夜は一まず、安宿へコロゲ込むことにする。一宿１５０円也の看板に引かれる。ほんの目前が安房港でながめはよい。一番海辺の室で、防波堤に波がうちよせている。小雨降る中を、カバマダラめざして２時間がんばる。営林署の入口で１♂を取る。もうツマグロとの区別はよくわかる。とび方はやや弱い。もちろん例外はある。雨の合間を利用して付近の散歩を２，３回繰返す。こういう時刻には、ほとんどクサギの花にチョウは集中する。ミヤマカラスの新鮮な♂を孝信がネットに入れ笑顔だ。ツマベニも完全体は少い。ほとんどカバマダラに全力集中して、３♂♀を得る。もしものことを思い、接写リングを持つて出たものの、弟のポケットからいつの間にか飛び出している。時間をかけて捜すも無駄接写リングのほとんど役に立つことなしに消えたことを惜しく思う。風ははげしくなり、目前に塩風が鼻をつく。ラジオによると、屋久島を少しそれ、大隅半島へ‥‥と云つている。今度は帰省地へ向うらしい。我が家の心配しているであろうことを思い一電報を打つ、「ダイゲンキアンシンサレタシ。」、港入口の燈に、白波のはね返す姿が雄々として美しい。だが、不安の一夜である。予定は今日帰鹿する日なのに、この分だと２，３日は帰れないようだ。田中先輩はじめ友人に一筆する。

7月31日　　俄雨（台風）　安房

戸をたたく風に目を覚ます。外は少しは納まつているが、雨混りの弱い風が吹いている。どうも今日は一日宿ごもりらしい。午前中は一歩も出られなく、室内で品物の整理に時間を費す。旅館の女主人が、小生の学部に関心をもつてか、２時間余息子の宿題を手伝つてくれとのこと。明日は出校日と聞いてなるほどと苦笑いする。その後の茶菓子や、サービスの増えたことには、おかしくなつた。その後の、ていねいさには、わざとらしく、返つて気持が悪かつた。午后は少し風も弱まつてきたので、風雨の弱い中を利用してカバマダラの調査。あれほど何回も歩き廻つていた営林署官舎の一花園に、あるある食草トウワタがいつぱいある。孝信の発見だ。幼虫まで２頭手にしている。昨日の接写リングの件で沈んでいた小生、元気づいて、早速そこの調査。すわり込むと同時に、成虫カバマダラも飛んできて花上に静止。孝信は宿へカメラ取りに走る。小生とまつている成虫に注意しながらも、目はトウワタ全体に走る。スミズミに注意するに、幼虫も大小いろいろ。すばらしい、アサギマダラをどこか思わす。下の方には、蛹も下つている。黒赤銅色をした羽化直前のものであろう、１個に目がつく。半ば透明で翅のカバ色がクツキリ浮び上つて見えている。フウフウ云う孝信よりカメラを取り、吸蜜中の成虫の♀♂　幼虫の２令と終令。「接写リングが欲しいな。」孝信の頭が一瞬下がる。向こうの蛹から翅化した。１０分後のことだ。あわててパチリ。あつという間に、割目ができ、胴体が出てきて羽が伸び切つてしまつた。成虫も２頭とんできてネットに入れる。長さ５，６mに渡つて植えてあるトウワタの花に集つているのだ。葉裏に１コ，２コ，３コの割合で卵をもつている。あちこちに見られる。中には総まつて産みつけられたガの卵らしいのもある。一番端の蛹を枝ゴトもぎ取ろうとした時、奇妙な姿が目には入つた。アシナガバチである。３令であろうか、幼虫に喰つついて針を刺した後であろうか、さかんに口でくい込んでいる。目前で盛んに喰いつぶし、しなびて体液をたらして、実にみじめな光景である。１枚撮つておく。１時間半の調査で、他に２件の同じような光景に出会つた。１つは２令、もう１つはやはり３令位であつたろう。ほとんどしなびて姿を失い、消えていく有様だ。カバマダラの天敵らしい。あちこちの地上３０cm位の所に、白半透明のぬけがらがあるのに気づく。幼虫はあちこちに見られる。主人にお願いして、２株分けてもらう。成虫はさらに２頭やつてきて、産卵を試みるのもいる。結局、卵より幼虫（１令～終令）、蛹、成虫と採集出来たのだ。台風のため帰れずしてかえつて得る所があつて良かつた。２人満足して宿へ。３角紙を整理していると、メスアカムラサキ♀も含まれていた。トウワタの所であろう。間もなく、風雨が又やつてくる。外では波の音、風雨の音が勘えない。室内では、盛んに夕食をとつている人間２人と若干のカバマダラ幼虫が、満足げに「対座している。テーブルの下に大事に置いて、喜こびの中に消燈。

8月1日　　俄雨　　安房～宮之浦へ

まだ風が続いている。台風10号はどうにか被害を残さず去つてくれたものの、ラジオによると、今の風は台風１２号の影響という。連続台風となるらしい。困つたことだ。今も、明日には、舟も出そうでないとのことだ。昨夜夜中に酒酔いのちよつとした事件があつたし、ここを出て、又

宮之浦の先生宅にお世話になることにする。カバマダラも最後の日とあつて、早朝、散歩を兼ねて調査する。当地は裏林のため、潮風の直接の風はうけないし、日照もなかなかいい所である。昨日のトウワタが元気がないので改めて一株いただく。バス停留所へ行つてから孝信は、出発前の15分間を利用して、ツマグロヒヨウモン，ツマベニ and カバマダラ2♂を取つて来る。安房を9時のバスで宮之浦へ。いつもは見える種子島も白波の中に消えている姿は、途中のバスの中が寂しかつた。先生宅、2回目でどうも恐縮に思いながらも‥‥気持良く迎えて下さつて感謝している。何だか我が家に帰りついた気持である。午后は風吹く雨の止んだ間を利用して、近所の散歩。ミナミヤンマやオニヤンマが、酔つたようにまつて行く。すべてあつという間に去つて行く。夜は台風の一夜を大きい家である先生宅で、安心した気持で、床について雑談にふける。のん気な台風一夜である。外はビユービユー、木々の小枝の種々雑多の音がしている。すべての窓戸にも、ささえがしてあるから、大丈夫と安心できる。12時頃、近所をかけている消防自動車らしい中から、海岸の人々へ高潮警報の声が聞える。大分台風は近づいてくる。この大きな家ではあるがミシリミシリ音がする。電燈は消えている。時々、大きく強く吹く、ヒヤリとすることも2，3度。いつの間にか寝りに入つていた。

8月2日　俄雨一時雷雨　宮之浦

風は大分吹きまくつたようだつたが、たいした被害もなく去つていつた。しかし、又もや、13号の発生という。明日もどうも舟の望みはない。台風の後の静けさの中をネットを振る。迷チヨウさんはおこしでないかな。高校の近く迄行つたり来たりで、ナガサキ，モンキ，アオスジ，ミヤマカラス，アゲハやモンシロ，スジグロシロ，キチヨウ，ツマベニ，ツマグロヒヨウモン等シジミではヤマト，ムラサキシ，ムラサキツバメ，ウラギン，ウラナミ，アマミウラナミ，又、クロセセリ，チヤバネセセリ等が見られた。そこで、孝信の採集したという、タテハモドキの採集地へ。荒水田を中心とした雑草中を飛び廻り、水田のイネの中を舞つているもの、静翅しているものとあちこちに見られる。先日は、まだ多かつたという。大へんな発生である。付近や、又海岸に注意するがイワダレソウは見つからない。荒水田に、スズメノトウガラシはある。帰途ミルンヤンマ，マユタテアカネ，オニヤンマを得る。又、雨がひどくなり、ついには、雷さんまで加つての、にぎやかさである。しかし、夕立になり、天気も隠やかになつてきて、雲行も良くくなり、今にも帰れそうである。

8月3日　曇りのち晴一時俄雨　宮之浦

久しぶりに気持良い朝である。うす曇の天気である。風は少しある。これで舟が出ない、というから寂しい。鹿児島に停船していて、波の止みしだい、本島を出て、翌日こちらを立つのである。9時半、2人で高校の裏山に登る。マユタテアカネ，ハグロ，シオカラ，オオシオカラ，オニヤンマの今までの種と、ヤブから林間と、暗闇をさまようカトリヤンマを得る。又、同様な所で、クロコノマが飛び出す。タテハモドキ，ウスイロコノマ，ツマベニ，スジグロシロ，キチヨウ，ツマグロキチヨウ，ミヤマカラス，モンキアゲハ、それにムラサキシジミ，ムラサキツバメ，アマミウラナミ，クロセセリが見られた。ギヨボクの小枝に静止しているキボシカミキリをとる。

近くを急行するのはクロセセリである。タテハモドキはこの通り、宮之浦には多発生しているのに、安房で一頭も見られなかつたのは不思議である。又、逆に、宮之浦小学校付近のあちこちにトウワタは見られるのであつたが、カバマダラの成虫はもちろん、幼虫、卵の1コすら見つけることはできなかつた。一通りの採集を終えて、高校の運動場で、ミナミヤンマに熱中していると、見たことのある男2人、まぎれもない肥後・橋元の両君だ。ここにいるとは予想もしていなかつた。どうにか体だけは無事だ。当校の寮にお世話になつていたのだ。台風で、結局宮之浦と安房とに限定されたそうだ。心配していただけに安心さと喜こびとで、話が続く。ヤクシマミドリはお互に駄目だつた。肥後君の提供してくれた中にチビサナエがは入つている。喜こんで聞くに、予想通り（前記録を聞いたことがある。）小杉谷の太忠岳分校の所であつた。お礼にカバマダラをやる。橋元君の中には、ミルン，コフキヒメイト，カトリヤンマがいる。彼等も台風のために、大へん弱つていて、早く帰りたいと、こぼしていた。しかし、風がなんだ、雨がなんだ、真夏の暑さがなんだ‥‥と、雨とも汗とも涙とも分かうぬ土まみれの姿で、歩き廻つている男達の美しき光景は、経験者でないと味えないものであろう。夕方より、陸上平常の天候となり、先生の誘いで、夜、宮之浦川の干潮時を利用して、珍らしい夜エビトリである。懐中電燈の明かりで、水面を照らし、エビの背後にアミを置いて、除々にかぶせるのである。それ以前に、自ら後へはねて、は入つてくれるからおもしろい。時間の tyming が少し遅くて、獲物は多くはなかつたが、楽しい夜の一時であつた。水面を提燈をともして、スベツて行く酒宴しつゝの夕涼み一行は、いかにものんびりした、平和そのまゝの姿であつた。明日、快速船鹿児島発の知らせを受ける。

8月4日　高曇りのち薄曇り　宮之浦

早朝、明朝相異なく快速船が出る知らせを受ける。盆帰りのため、先生夫妻も鹿児島行で、同行となるのだ。最後の自由のきく日をと、午前中一通り廻る。種類はたいして変りないが、カトリヤンマ，ハグロトンボ，オニヤンマ，ミナミヤンマ，シオカラ，オオシオカラ，シヨウジヨウ，ウスバキ，ギンヤンマ，コフキヒメイトトンボ，マユタテアカネのトンボ類，ゴマダラカミキリ，ビロウドカミキリ，ハナムグリ，シロテンハナムグリ，ヒメコガネ，ドウガネブイブイ，マメコガネ，カナブン，クロタマムシの甲虫類，ヤマトシジミ，ウラナミシジミ，アマミウラナミシジミ，ウラギンシジミ，ヤクシマルリシジミ，クロセセリ，チヤバネセセリ，イチモンジセセリ，アオバセセリ，モンシロ，スジグロシロ，キチヨウ，ツマベニ，ツマグロヒヨウモン，アカタテハ，スミナガシ，タテハモドキ，ヒメジヤノメ，クロコノマ，ウスイロコノマ，ミヤマカラス，ナガサキ，クロ，アオスジ，キアゲハ，アゲハ等のチヨウ類等が見られた。この中、ウスイロコノマが、クロコノマより多く普通に見られたのもおもしろい。昨日、案内したタテハモドキの所には、2人の姿も見られる。共に付近の散歩、トウワタには再度注意するが駄目。ギヨボクにツマベニの終令幼虫が見られる。大男の細い木に登つてちよこちよこしている姿は、余りよくない。2人はギヨボクに一生懸命だ。午後は、先生達や孝信はウナギ取りである。汗ばんだ体を、冷たい宮之浦川に一泳ぎして流す。余り長くは続かない。シビ

レてくる。夜は最後の夜を、ウナギでおいしくいただく。本当にいよいよ最后の夜だ。何と明日こそ明日と何回もくり返した最後の夜であつたろう。もう、荷の準備もできている。三角紙が、カンで3箱つまつている。ナフタリンの量が少な過ぎたか、初期の奴は悪臭をかなでている。整理している1枚1枚の3角紙に想い出がある。

8月5日　晴れ一時薄曇り　宮之浦〜一湊

のびのびになつていた舟も、いよいよ今日出るのだ。午前7時半、宮之浦発の満員バスで一湊へ。4日間も舟が出なかつたとあつて、島にとり残された人、又、本島へ行く人と、客は多いのだ。ゆられゆられて一湊へ、途中、もうあきてはいるが、海辺を雄々としているツマベニの姿はやはりいい。ミヤマカラスが大きな翼を谷川にうつしている。一湊での1時間、最後のネツトを振る。もつぱら、心はカバマダラである。校庭にトウワタが2，3株あるが、何らそれらしい食痕すら見つからない。真赤なブツソウゲの花が日にさえて美しい。ツマベニの姿を時々見かける。又、台風にそなえてであろう、家というたいていの家の屋根に、多くの大きな石がのつけてある。台風の強さを物語つている。尾之間辺の南国地帯でもよく見られた光景だ。モンシロ，キチヨウ，ツマベニ，クロアゲハ，キアゲハ，アゲハ等が見られたに過ぎない。トンボは、シオカラとウスバキのみ。一周して港に行くと、200m位先に、すでに舟は到着している。例のはしけでもつて、屋久島の陸を離れる。別離を惜しむ人達が岩ずたいに並び手をふつている。はしけのテープはちと興ざめる。行きも帰りも見送り人のない我々である。が、多くの見送り人々の裏山脇で、我々にはツマベニが翼を振つている。命びろいして、ホツトしての見送りかな。何日もとり残され、早く帰りたいという気もないではなかつたが、こうして陸を離れると、まだいたい気がつのる。階段を登つて行くと、甲板まで一ぱいの客である。行きも多かつたが、段がちがう。どうにか座る場所をみつける。間もなく、ボオーツと汽笛をならす。白波を尾に引いて舟は動き出す。屋久島よサラバ、再会を約束して……。　舟上では、3人とも、ひざの上に小箱をかかえてあたかも宝箱とも思われる。云わずとしれた。カバマダラの幼虫、蛹等を中心としたコワレモノの品々である。舟中では、すでに想い出となりかける話々が続く。すでに屋久島は小さい。…10日間の予定も名物の台風まで連続して来島し、15日間となり、昆虫採集のみならず、南国の生物、又社会見学の出来たことは、この上ないいい夏休みを過せたことと満足している。

懐しの桜島の見えたのは5時少し前であつた。

尚、同行の老海原先生、当地においていろいろとお世話になつた鈴掛先生夫妻はじめ、土地の皆様に誌上をもつて改めて深謝します。　（1961　盛夏）　K.N

〔採集記録〕

本文のまとめのために、採集記録を記す。

記録順序は、種名，採集（目撃）日，採集場所，Coll.Poss（特に記さぬ限り、K.N，T.N とする）地名略号として、（A）安房〜小杉谷〜トロ終点〜花江河，宮之浦（M）とする。
（B）（C）（D）

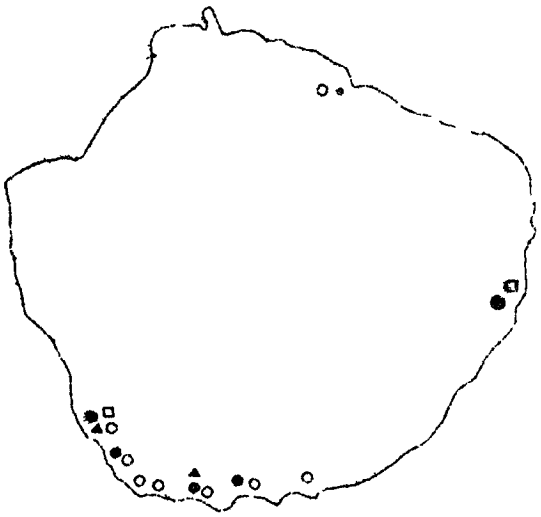


Fig. 2

● カバマダラ

○ タテハモドキ

□ メスアカムラサキ

▲ Catopsilia

△ リュウキュウムラサキ

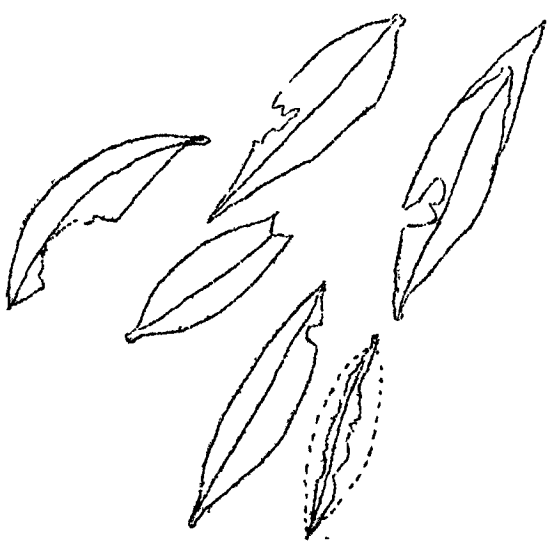


Fig. 3　カバマダラ幼虫の食痕

PAPILIONIDAE

o Byasa alcinous KLUG 1836 (ジャコウアゲハ)
VII. 25 (D), VII. 25, 26(E)

o Graphium sarpedon nipponum FRUHSTORFER(アオスジアゲハ)
VII. 23, VIII. 2・3・4, (M), VII. 24(A), VII. 24・27(B), VII. 28 (栗生), VII. 29(湯泊)

o Papilio xuthus LINNE (アゲハ)
VII. 23, VIII. 2・4, (M), VII. 24・28, (A), VII. 28, (栗生), VII. 29 (湯泊, 平内, 尾之間), VIII. 5(一湊)

o Papilio machaon hippocrates FELDER et FELDER(キアゲハ)
VII. 24, (A, B), VII. 28, (栗生), VII. 29(栗生, 平内, 湯泊, 尾之間), VIII. 4, (M), VIII. 5, (一湊)

o Papilio protenor demetrius CRARER (クロアゲハ)
VII. 23, VIII. 4, (M), VII. 24・28, (A), VII. 24・27, (B, C), VII. 28(バス中より目撃), (麦生, 尾之間), VII. 28, (尾之間), VII. 29, (湯泊, 尾之間), VIII. 5, (一湊, 目撃)

o Papilio memnon thunbergii SIEBOLD (ナガサキアゲハ)
VII. 23, VIII. 2・4, (M), VII. 24, (A, B), VII. 28, (栗生), VII. 28, (湯泊)

o Papilio helenus nicconicolens BUTLER (モンキアゲハ)
VII. 23, VIII. 2・3, (M), VII. 24, (A, B), VII. 28, (栗生), VII. 29, (尾之間)

o Papilio maackii satakei MATSUMURA (ミヤマカラス)
VII. 24・27, (A, B), VII. 25・27, (C), VII. 29, (湯泊), VII. 30, (A), VIII. 2・3・4, (M), VIII. 5, (M〜一湊, バス中より目撃),

PIERINIDAE

o Eurema laeta bathesba JANSON (ツマグロキチョウ)
VII. 23, VIII. 3・4, (M), VII. 24, (A),

o Eurema hecabe mandarina DELORZA (キチョウ)
VII. 23, VIII. 2・3・4, (M), VII. 24, (A), VII. 28, (栗生), VII. 29, (栗生, 湯泊, 尾之間), VIII. 5, (一湊)

o Pieris rapae crucivora BOISDUAL (モンシロチョウ)
VII. 23, VIII. 2・4, (M), VII. 28, (栗生), VII. 29, (尾之間), VIII. 5, (一湊)

o Pievis melete MENETRIES (スジグロシロチョウ)

Ⅶ. 24, (B), Ⅷ. 2・3・4, (M)

o Catopsilia sp. (ギンモンウスキチョウ♀らしい)

Ⅶ. 29, (湯泊, 目撃)

o Hebomoia glaucippe shirozui KUROSAWA et OMOTO (ツマベニチョウ)

Ⅶ. 23, Ⅷ. 2・3・4, (M, 終令幼虫♂), Ⅶ. 24・27・28, (A), Ⅶ. 24 (B), Ⅶ. 28, (A～尾之間バス中より目撃), Ⅶ. 28, 栗生, Ⅶ. 29・30, (湯泊, 尾之間), Ⅷ. 5, (M～一湊バス, 目), (一湊)

DANAIDAE

o Danaus chrysippus LINNE (カバマダラ)

Ⅶ. 28, 30, Ⅷ. 1, (A, 卵～幼虫(1令～終令)～蛹～成虫), Ⅶ. 28, (湯泊, 平内, バス中より目撃) (栗生, 目撃), Ⅶ. 29, (中間, 湯泊, 平内)

SATYRIDAE

o Ypthima argus BUTLER (ヒメウラナミジヤノメ)

Ⅶ. 24・27, (A, B)

o Mycaresis gotama fulginia FRUHSTORFER (ヒメジヤノメ)

Ⅶ. 24, (A), Ⅷ. 4, (M)

o Neope goschkevitschii MENETRIES (キマダラヒカゲ)

Ⅶ. 25・27, (B～C), Ⅶ. 26, (E 花江河)

o Melanitis leda LINNE (ウスイロコノマ)

Ⅶ. 24, (A, B), Ⅶ. 26, (B～C), Ⅶ. 27 (T・N), Ⅷ. 3・4, (M)

o Melanitis phedima oitensis MATSUMURA (クロコノマ)

Ⅶ. 24, (B, B～C), Ⅷ. 3・4, (M)

o Dichorragia nesimachus nesiotes FRUHSTORFER (スミナガシ)

Ⅶ. 23, Ⅷ. 4, (M), Ⅶ. 24, (A, B)

o Cyrestis thyodamas mabella FRUHSTORFER (イシガケチョウ)

Ⅶ. 24・27, (B), Ⅶ. 25・27, (C)

o Vanessa indica HERBST (アカタテハ)

Ⅶ. 23, Ⅷ. 4, (M), Ⅶ. 24, (A, B)

o Kaniska canace no-japanicum SIEBOLD (ルリタテハ)

Ⅶ. 27, 31, (A, 目撃)

o Precis orithya LINNE (タテハモドキ)

Ⅶ. 27 (T・N), Ⅷ. 2・3・4, (M), Ⅶ. 28, (中間, 栗生, バス中より目撃) Ⅶ. 29, (栗生, 中間, 湯泊, 平内, 尾之間)

o Hypolimnas bolina philippensis BUTLER (リユウキユウムラサキ)

Ⅶ．10～20（1961），（栗生，call 同校生物部員，フイリピン型1♂）

o Hypolimnas misippus LINNE （メスアカムラサキ）

Ⅶ．30，（A，1♀），Ⅶ．10～20（1961），（栗生，call同校生物部員，4♂♂）

o Argyreus hyperbius LINNE （ツマグロヒヨウモン）

Ⅶ．23，Ⅷ．4（M），Ⅶ．24・27・28，Ⅷ．1，（A，3令，終令幼虫含む），Ⅶ．24・27，（B・C），Ⅶ．26，（花江河，終令幼虫含む），Ⅶ．29，（湯泊，尾之間）

LYCAENIDAE

o Arhopala japonica MURRAY （ムラサキシジミ）

Ⅶ．24，（A，B），Ⅶ．28，（栗生），Ⅷ．2・4，（M）

o Arhopala bazalusturbata BUTER （ムラサキツバメ）

Ⅶ．24・27，（A，B），Ⅷ．2・3，（M）

o Zizeeria maha argia MENETRIES （ヤマトシジミ）

Ⅶ．23，Ⅷ．3，（M），Ⅶ．24・27，（A），Ⅶ．28，（A～尾之間，バス中より目撃），Ⅶ．28・29，（栗生）

o Celastrina argiolus ladonides de IORZA （ルリシジミ）

Ⅶ．24，（B），Ⅷ．2，（M）

o Celastrina puspa umenonis MATSUMURA （ヤクシマルリシジミ）

Ⅶ．24・27，（B），Ⅶ．25，（C），Ⅶ．27，（B～C），Ⅷ．4，（M）

o Celastrina albocaerulea MOORE （ナツマシジミ）

Ⅶ．24・27，（B）

o Lampides boeticus LINNE （ウラナミシジミ）

Ⅶ．24，（A），Ⅶ．28，（A～栗生，バス中より目撃），Ⅶ．28，（栗生），Ⅶ．4，（M）

o Nacaduba kurava septentrionalis SHIROZU （アマミウラナミシジミ）

Ⅶ．24，（A），Ⅶ．24・27，（B），Ⅶ．28，（A～栗生，バス中より目撃），Ⅶ．29（栗生～尾之間），Ⅷ．2・4，（M）

CURETIDAE

o Curetis acuta paracuta de NICEVILLE （ウラギンシジミ）

Ⅶ．24，（B），Ⅷ．2・4，（M）

HESPERIIDAE

o Choaspes benjaminii japonica MURRY （アオバセセリ）

Ⅶ．24・27，（A，B），Ⅶ．25，（C），Ⅷ．4，（M）

o Pelopidas mathias oberthuri EVANS （チャバネセセリ）

Ⅶ。24・27，(A・B)，Ⅶ。28，(麦生)，Ⅷ。2・4，(M)，

o Paranara guttata BREMER et GREY (イチモンジセセリ)

Ⅷ.4，(M，目撃)

o Notocrypta curvifascia FELDER et FELDER (クロセセリ)

Ⅶ.24，(A)，Ⅷ。2・4，(M)

Coleoptera

A．イトトンボ科

o Agrioncnemis・famina Brauer (コフキヒメイトトンボ)

Ⅶ.31，(K.Hashimoto)，Ⅷ.4，(M)

B．ヤマイトトンボ科

o Rhipidolestes・aculeata Ris (トゲオイトトンボ)

Ⅶ.24・27，(B，C，産卵状態観察)，Ⅶ.25・26，(C・D，花江河)

C．カワトンボ科

o Calptery・artrata Selys (ハグロトンボ)

Ⅶ.29，(平原，小島)，Ⅷ.3・4，(M)

D．オニヤンマ科

o Chlorgomphus・brunneus costalis Asahina (ミナミヤンマ)

Ⅶ.23，Ⅷ.1・3・4，(M)

o Anotogaster・sieboldii Selys (オニヤンマ)

Ⅶ.24・27，(A・B)，Ⅶ.26，(C・D)，Ⅶ.29，(A～尾之間，バス中より目撃)，Ⅷ.1・2・3・4，(M)

E．ヤンマ科

o Gynacantha・japonica Bartnef (カトリヤンマ)

Ⅷ.1，(K.Hashimoto)，Ⅷ.3・4，(M)

o Planaeschna・milnei Selys (ミルンヤンマ)

Ⅶ.24，(B，B～C)，Ⅶ.26・27，(C・D)，Ⅷ.2，(M)

o Anax・partheno 小杉谷 julius Brauer (ギンヤンマ)

Ⅶ.29，(平内，小島)，Ⅷ.3・4，(M)

F．トンボ科

o Pantala・flavescens Farbricius (ウスバキトンボ)

Ⅶ.23，Ⅷ.2・4，(M)，Ⅶ.24，(A)，Ⅶ.29，(小島，尾之間)，Ⅷ.5，(一湊)

o Crocothemis・Servilia Drury (シヨウジヨウトンボ)

Ⅶ．２９，（小島），Ⅷ．４，（M）

o Orthetrum・salina Drury （ハラボソトンボ）

Ⅶ．２９，（湯治～平内，尾之間）

o Orthetrum・albistrylum speciosum Uhler（シオカラトンボ）

Ⅶ．２３，Ⅷ．３・４，（M），Ⅶ．２４，（A），Ⅶ．２８，（尾之間），Ⅶ．２９，（湯治，小島，尾之間），Ⅷ．５，（一湊）

o Orthetrum・triangulare Selys （オオシオカラトンボ）

Ⅶ．２３，Ⅷ．３・４，（M），Ⅶ．２４，（A），Ⅶ．２４・２７，（B），Ⅶ．２９，（小島）

o Sympetrum・eroticum eroticum Selys （マユタテアカネ）

Ⅶ．２４，（A），Ⅷ．２・３・４，（M）

（教育学部２年）

編　集　後　記

実に遅くなりましたが、ここにLEBEN４号をお贈り致します。会計その他、事務上のため遅れたことをお詫びします。

内容は当地の南国的土地柄を出し過ぎた気配があつて、遠く離島中心の特集号となつたようです。特定内容、特定会員に片よつてしまいましたが、次号は会員諸氏の全員一報を期待したいところです。

総会の時にも話が出ましたが、それぞれの学部の都合で全体的まとまりは、案外できていないようですが、会の統一のためにも、来学年はひとつ、何か共同的研究を年間目標として、各グループ１つずつでも試みたらどんなものでしょう。

今後の我々生研の発展のため、次号は是非とも全員の玉稿を希望します。

（３・３０　K・N）

LEBEN　第 4 号

鹿児島大学生物研究会会誌

発行日：　1962年3月30日

編集者：　成　見　和　総

校　正：　成見和総・田中章・田中洋

印　刷：　鹿児島市山下町98明るい窓社
電話 ②－7385

鹿児島市鴨池町鹿児島大学教育 学部内